令和６年度指定
ＷＷＬコンソーシアム構築支援事業

事業報告書
第１年次

令和７年３月

学校法人摺河学園

姫路女学院中学校・高等学校

目　　次

事業報告
１ 研究開発概要・・1

２ 管理機関の取組み
【1】AL ネットワークの構築・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
【2】教員研修・・15

３ 拠点校の研究開発の内容・活動実績 （探究型学習）
【１】未来クリエイト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
【２】日本文化探究・・24
【３】カナダ海外研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
【４】広島研修・・31
【５】ハワイ短期語学研修下見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
【６】外部発表・・38
【７】ルーブリック評価作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

４ 拠点校の研究開発の内容・活動実績 （留学生受け入れ）・・・・・・・・・42

５ 外部連携・・・45

６ 研究開発の成果と課題
【１】成果概要・・・48
【2】今後の課題と展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
【3】検証委員からの総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

１　研究開発概要

事業結果説明書

１．事業の概要

（1）事業の実施期間

令和６年９月２０日（契約締結日）～　令和７年３月３１日

（2）事業拠点校名

学校名：姫路女学院中学校・高等学校

（3）構想の概要

構想名

城下町 Himeji からのグローバル人材育成

概　要：

姫路を中心とする兵庫県の西播地区は世界文化遺産姫路城の城下町として、古くから国際交流の一つの拠点として栄えてきた。本構想では、学校法人摺河学園の管理のもと、拠点校の姫路女学院中学校・高等学校を中心に、街のいたるところに日本文化がなお息づく城下町という特色を活かし、留学生の受け入れと探究型学習を通じて、グローバルな視点で都市の魅力化に資する若者の育成を目指す。日本人高校生は、留学生との交流や海外研修、大学と協働したカリキュラムを通じて、実践的な英語力を身に付けつつグローバルな意識を醸成し、まちの魅力化を考える。同時に外国からの入学生を含めた留学生の受け入れ拡大を進め、彼らは地元企業や大学と協働したカリキュラムを通じて地域社会を理解し、まちの魅力化を考える。将来的に、日本人高校生と留学生が切磋琢磨し、グローバル・ローカル双方の視点で地域社会を活性化する高度人材となることを目指す。

（4）本事業における教育課程の特例の活用　　無

２．管理機関の取組・支援実績

(1)実施日程

事業項目	実施期間（令和６年９月２０日　～　令和７年３月３１日）											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
城下町教育 AL ネットワーク推進会議							○					○
拠点校・事業連携校連絡協議会												○
運営委員会							○					
検証委員会												○
外国人留学生の受け入れ体制						○	○	○	○	○	○	○
外国人留学生のための日本語教育体制						○	○	○	○	○	○	○
大学教育の先取り履修実施計画							○	○	○	○	○	○
国際会議の実施に向けた計画												○
情報発信・周知											○	○

(2)実績の説明

【実施体制の整備】

〔a.実施体制の整備状況〕

管理機関において，「城下町教育 AL ネットワーク」の整備を進めた。それにあたり、AL ネットワーク推進会議を実施した。今年度の会議は，拠点校での研究開発体制の整備とその確立を重視するため，拠点校での取組に直接関係する機関に限定して対面で行い，その議事を事業連携校及び事業協働機関に共有した。

また，連携校との協働を図るための拠点校・事業連携校連絡協議会を１回実施した。また大学との先取り履修を可能にするための調整等を行う先取り履修（アドバンストプレイスメント（以下、AP））推進会議にかかる打ち合わせをオンライン形式で１回実施した。

さらに，専門的な視点から事業の運営等に係る指導・助言をしていただく「運営指導委員会」（１回），事業の効果検証を目的にした「事業検証委員会」（１回）を実施した。運営指導委員会は対面で行い、事業検証委員会はオンライン形式で行った。

〔b. 情報共有体制の整備状況〕

国内事業連携機関に対してメーリングリストを作成した。また，国外への発信については，姫路女学院中学校・高等学校内に本事業の特設ページを設け，日本語・英語双方の言語で取り組みを発表できるようにした。

〔c. 管理機関及び拠点校の長の役割〕

城下町教育 AL ネットワークの整備にあたり，関係機関への協力の要請を行い，ネットワークの円滑で確実な整備に努めた。また，管理機関及び拠点校内の担当との打ち合わせや意見交換の機会を持ち，構想内容の水準を維持し，必要な改善を図るための助言を行った。

〔d. 運営指導委員会・事業検証委員会〕

＜運営指導委員会＞

本事業の実施に際し，専門的な視点から事業の運営等に係る指導・助言をしていただく「運営指導委員会」を設置した。委員会の構成員は， 甲南学園理事長 長坂悦敬氏， 姫路市前市長 石見利勝氏，但陽信用金庫支配人 桑田純一郎氏の三名である。

今年度は第１回運営指導委員会を令和６年１０月２９日に対面で開催した。拠点校での研究開発体制の整備とその確立を重視することを目的に限定的な参加者とすることとした城下町教育 AL ネットワーク推進会議を兼ねた。本会議では事業計画の説明及び質疑応答を行った。以下に内容を簡潔に記載する。

- 取り組みの中でも， 外国人留学生の受け入れ， 特にオフショアスクール制度の立ち上げにもっとも共感している。
- 日本語， 日本文化を習得するためには， 学校生活を通していろいろなことを体感することが重要だと思う。
- オフショアスクールからのキャリアデザインをどのように作るかといった， 生徒の将来に目を向けて進路指導することが重要である。
- 連携校のある東南アジアや南米には素晴らしい文化があるので， ぜひ好奇心をもってかかわってほしい。
- 現状， 企業に就職する外国人人材は残念ながら日本文化が身についていないので， この構想で育つような人材に期待したい。

なお， 今年度の成果に対する評価と助言については， 令和７年度第１回運営委員会にて意見交換をいただく予定である。

＜事業検証委員会＞

本事業の実施状況を検証するにあたり「事業検証委員会」を設置した。委員会の構成員は，甲南学園経営企画室 新美太基氏，兵庫県元副知事 金澤和夫氏，玉田学園理事長 中村忠司氏の三名である。

今年度は第１回事業検証委員会を令和７年３月２１日にオンラインで実施した。そこでは，本事業の研究成果を測定するルーブリックについて意見交換及び助言をいただいた。拠点校のグランドデザインに基づいたルーブリックを作成するにあたり設定した１０の観点については肯定的な評価をいただいた。以下、具体的な助言内容について簡潔に記載する。

・拠点校の伝統である、心の教育としての「教養」をルーブリックでどのように位置づけるかを検討すべきだろう。
・パレット上の各色の大きさで伸ばしたい資質・能力を可視化すると良いのではないか。
・ルーブリック評価を取り入れるにあたり，教員の理解が不可欠である。教員研修が重要である。

〔e. 卒業生の進路等の情報を収集する状況について〕

本事業に関わる生徒が拠点実施校を卒業する令和８年度に向け，卒業後の進路等の必要な情報を収集する仕組みの検討をカリキュラム開発と並行して進めている。進路指導部にて既に把握する仕組みのある進学・就職先の情報に加え，本事業の成果を比較検討するために必要な情報を追加収集できるようにする。また，参考情報として，拠点校を中心にこれまでに受け入れてきた留学生の現在の進路についても情報の収集を進めている。

〔f. 外国人生徒の日本での学習や生活の支援体制〕

＜概要＞

令和６年度より外国人生徒の組織的な受入を進めるため、事業協働機関であるインドネシアのタラカニタ財団が管轄する、タラカニタ第４中学校（ジャカルタ）をオフショアスクール（海外分校）として、姫路女学院高等学校に外国人生徒が継続的に入学する体制を整備した。それに伴い当該生徒への支援体制の構築にも努めた。

まず，拠点校における外国人生徒受け入れを推進する国際連携推進センター長を教頭に任命し，拠点校全体で受け入れを進める体制を整えた。

＜学習支援＞

外国人生徒対象のカリキュラムの作成にあたり，カナディアンアカデミー日本語教師の佐藤奈津氏をカリキュラムアドバイザーとして任命し，職務にあたらせた。

また，オフショアスクールと姫路女学院高等学校との連携をスムーズに行うため，入学を控えたオフショアスクールの生徒に日本語教育をオンラインで行う日本語講師を一名採用した。

＜生活支援＞

外国人留学生が寮生活を送ることを念頭に，彼らの生活における支援を行う職員を一名任命した。

さらに，外国人生徒の日本での学習をより円滑に進めるためにオフショアスクールで行う日本語教育の計画について，管理機関の長と拠点校の教頭兼国際連携推進センター長が令和７年３月２日から６日にかけてタラカニタ財団を訪問し，協議を行った。

【財政等支援】

〔a. 管理機関における自己負担額の変動〕

特になし

〔b. 管理機関による財政的支援，研修等〕

管理機関のもと，拠点校において，令和６年７月２２日にカリキュラムアドバイザー佐藤奈津氏により，日本語指導が必要な生徒に対する理解を深める研修を実施した。参加教員からは，日本語指導を念頭に置いた授業設計に関する方法を知ることができ，有意義な研修だった等の意見が寄せられた。

さらに，留学生受け入れ体制づくりの本格化に向け，令和６年度末には，カリキュラムアドバイザーによる関係職員への研修形式で，令和７年度の日本語指導計画を策定した。

〔c. 国の委託終了後に向けた実施計画〕

拠点校が姫路市と締結する包括連携協定により，事業継続，特に外国人留学生を継続的に受け入れるにあたっての支援に向けた具体的な計画について協議を開始した。

また，外国人留学生等の生徒募集のため Himeji International School としての英語版ホームページを開設した。

【ＡＬネットワークの形成】

〔a. ＡＬネットワーク運営組織の実績〕

・城下町教育 AL ネットワーク推進会議

管理機関・拠点校・事業協働機関（大学・企業）が参加し，情報共有と事業の方向性決定を行う。【実施体制の整備】a に記載の通り，第１回運営委員会と同時開催とした。

・拠点校・事業連携校連絡協議会

管理機関・拠点校・事業連携校が参加し，拠点校での研究開発や取り組みの共有を行う。令和７年２月に開催した（【AL ネットワークの形成】b に後述）。

・先取り履修（アドバンストプレイスメント（以下、AP））推進会議

管理機関・拠点校・事業協働機関（大学）が参加し、高大連携事業について協議する。令和６年度に事業協働機関の甲南大学と拠点校で連携協定を結んだ（後述）。

〔b. ＡＬネットワークにおける情報共有体制と協働事業の開発〕

拠点校における本事業の成果の発信元として特設ホームページを開設し，ネットワーク関係機関との情報共有を図っている。

また，事業連携校を交えた「拠点校・事業連携校連絡協議会」を令和７年２月２７日にオンライン形式で開催した。管理機関及び拠点校に加え， 国内連携校の３校からの出席者は， 近江兄弟社中学校・高等学校　谷口副校長、静岡聖光学院中学校・高等学校　田中教頭、蒼開中学校・高等学校　中嶋教頭であった。事業計画の説明に加え， 各校での留学生受け入れ状況， その成果と課題について意見交換を行った。そこから，留学生を積極的に受け入れ，グローバル人材として育成しようという取り組みを各校が行っていることがわかり， 本事業との方針の一致を確認することができた。今後も連携を強化する旨を確認し，会は閉会した。

c. 修了生のトップ大学等への進学，海外留学等，外国人留学生受け入れの促進に寄与〕

令和６年度においては，当該プログラムが修了していないことから，該当する特記事項はないが，下記記載の各研修旅行等により意識を高める取り組みを行った。

・中学校カナダ修学旅行における現地校訪問
・高等学校ハワイ研修旅行における現地校および現地大学訪問
・姉妹校ナザレ校（ポーランド）との広島研修を始めとした交流

また，外国人留学生受け入れに関しては，事業協働機関のタラカニタ財団との協議の上，引き続き留学生の受け入れを進めていくことで合意しているほか，複数の企業等からの帰国子女についての問い合わせを受け，今後受け入れを進めていくことにしている。

〔d. 組織体制〕

城下町教育 AL ネットワークの構築及びカリキュラム開発にあたり，下表のような組織体制を構築した。

区分	機関・担当者名	主な業務項目
事務局	学校法人摺河学園理事長 学校法人摺河学園統括	・事業計画の作成・進捗管理 ・AL ネットワーク内の連絡・調整 ・AL ネットワーク内外の情報収集・発信 ・事業評価の実施 ・事業経費の運用・管理
カリキュラムアドバイザー	カナディアンアカデミー 日本語教師　佐藤奈津氏	・事業拠点校の、外国からの留学生等の受け入れ体制の研究開発に関する指導・助言
事業拠点校	海外交流研究開発部会　３名	・事業拠点校の海外交流に関わる取り組みの企画や運営全般
	カリキュラム研究開発部会 ５名	・事業拠点校のカリキュラム開発 ・開発カリキュラムに基づいた授業の計画・実施・評価

〔e. 高校生国際会議等の開催準備状況〕

高校生国際会議については，令和７年度の実施に向けて準備を進めている。参加予定の海外事業連携校であるケーマシリ・メモリアル校（タイ）及び啓星高校（韓国）それぞれの担当者と，開催目的の合意形成を図る予定である。

〔f. フォーラムや成果報告会などの実施〕

事業成果の普及にあたっては，拠点校で２月に実施するリベラルアーツフェスティバルにおいて，その成果を拠点校生徒及び保護者を対象に報告の場を設けた。また，兵庫県高等学校探究活動研究会や姫路市の高校生サミット等，行政や企業の主催する探究型学習成果発表の場にも積極的に参加する。令和７年度には，リベラルアーツフェスティバル内において WWL 事業報告会を行い，国内連携校や事業協働機関に観覧を案内する計画である。

〔g. 情報収集・提供〕

事務連絡については Email を活用し，オンラインでの会議・打ち合わせにあたっては Web 会議システムである zoom を活用した。

〔h. 関係機関との協定文書等〕

事業協働機関である甲南大学と先取り履修に関する連携を視野に入れた協定を締結した。その他，運営指導委員・検証委員への委嘱手続きを行った。

３．研究開発の実績

(1)実施日程

事業項目	実施期間（令和６年９月２０日　～　令和７年３月３１日）											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
カナダ海外研修						○						
ハワイ海外研修												○
広島研修							○					
外国人留学生の受け入れ体制						○	○	○	○	○	○	○
外国人留学生のための日本語教育体制						○	○	○	○	○	○	○
探究型カリキュラム開発						○	○	○	○	○	○	○
大学からの講師派遣							○	○				

(2)実績の説明

【研究開発・実践】

〔a. 海外研修等の実施〕

＜カナダ研修旅行＞

海外交流研究開発部会を中心に行った研修下見を踏まえ，９月２６日（木）～１０月３日（木）で中高一貫コース中学校３年生対象の必須海外研修として実施した（参加生徒９名，引率教員２名）。活動の中心はバンクーバーであった。そこでは，現地高校でのカナダ人高校生との交流や,ホームステイを行った。また，現地映像専門学校で最先端の映像技術に触れた。本研修により，英語を話す力の向上や今後の英語学習への動機づけはもちろん，多様性を受け入れることや自ら挑戦することの大切さを学んだ。研修成果は，研修中に心に残った事象をもとに探究を行い，動画とスライドを用いながら，拠点校内のリベラルアーツフェスティバルで発表する。

＜台湾海外研修＞

研修時の訪問先である国立基隆女子高級中学（台湾）の担当者変更等に伴い，具体的な研修計画の立案をすることはできなかった。しかしながら，研修に先立っての事前学習として，生徒間でのポストカードの交換を行った。担当教員間で今後の交流計画を策定中である。

＜ハワイ短期英語研修＞

３月２４日（月）～３月３０日（日）での実施を予定しており，上記台湾海外研修の対象生徒１名を含む生徒２名及び引率教員１名でハワイ・ワイキキへ渡航する。そこでは，研修を牽引するリーダーシップの育成を目的とした活動を行う。具体的には，現地校の授業体験や，現地大学の見学である。また，旅程についても生徒自ら考案する。本研修に先

立ち，９月２６日～９月３０日に研修先の下見を行い，１月２２日～２５日には訪問先との連携交渉を行った。それぞれ教員１名を派遣した。

〔b. 外国人生徒の受け入れ体制〕

＜学習支援＞

カリキュラムアドバイザーとして招聘した佐藤奈津氏のもと，学校設定科目として第二言語としての日本語を扱う科目を新設した「国際カリキュラム」を作成した（教育課程表参照）。対象は，オフショアスクールからの入学生をはじめとした留学生と，市内中学校卒業生で外国にルーツを持つ生徒のうち，学習言語としての日本語の使用が難しい生徒である。カリキュラム内では，「日本語Ⅰ」「日本語会話Ⅰ」「日本文化探究Ⅰ」の３科目を日本語教育として展開し，総合的に日本語力を向上させるため，科目間での連関を重点的に行った（担当教員　計６名）。また，日本語及び各教科の学習補充のため，放課後及び長期休業中に補習授業を行った。これらの成果検証として，学期ごとの日本語実力テストを行ったところ，それぞれの生徒で着実な伸びが見られた。１年間を通じての成果検証のため，JTEST（日本語実用能力試験）を３月に受検した。

一方，その他については，上記国際カリキュラム受講生徒（外国人生徒含む）と特別進学国際教養コースの日本人生徒が共修する授業編成としている。特に，英語教育においては，彼らが共修する授業編成とすることで，双方が刺激しあう環境を作り出した。

＜生活支援＞

支援担当に任命した職員を中心に，寮生活を送る外国人生徒の生活支援を行った。在留や保険等の行政手続きや医療機関の受診、その他生活支援において，丁寧なコミュニケーションを重視した。必要に応じて保護者とも直接連絡をとり，その際は翻訳機等を活用した。

〔c. 設定したテーマ〕

拠点校では，位置する姫路市の課題を鑑み，ＳＤＧｓの目標１１「住み続けられるまちづくりを」を念頭において，同市の魅力化を目指して各研究開発を行った。特に，研究開発カリキュラムの「未来クリエイト」「日本文化探究」では，姫路市の魅力化を２ヵ年のカリキュラム内で取り組むことを目標の一つとしている。

〔d. 先進的なカリキュラム開発〕

＜未来クリエイト＞学校設定科目（２単位）

一般社団法人 green4 の監修のもと，中高一貫コース高校１年生の年間シラバスを作成し，探究型学習を行った。１年次は「石鹸づくりワークショップ」を通して事業運営について学び，その成果を２月に行うリベラルアーツフェスティバルで発表した。その過程において，事業協働機関の甲南大学からの講師派遣を２回依頼し，顧客からのデータ収集及びその分析についての講義を実施した。また並行して，テーマとなる「姫路の魅力化」に関わり姫路市の課題特定

を進めた。２年次からの具体的な探究型学習に向け，関連機関と協力しながら，２年生のシラバス作成も進めている。

＜日本文化探究＞学校設定科目（２単位）

外国人留学生を含めた国際カリキュラム履修生徒１年生の年間シラバスを作成し，探究学習を行った。１年次は日本の伝統文化（茶道）をテーマとし，日本社会に根付く礼儀，作法や言葉遣いを学んだ。同時に，日本語教育との融合も図った（e に後述）。その成果は，３月に行われる姫路市主催の高校生サミットでポスター発表を行った。２年次からはテーマとなる「姫路の魅力化」の探究型学習を進めるべく，策定した国際カリキュラム内の科目とも連関しながら，シラバス作成を進めている。

〔e. 外国語を用いた探究型学習〕

【研究開発・実践】d 記載の「日本文化探究」において，外国語（日本語）を用いながらの探究型学習を進めた。聞く・読む・書く・やりとり・発表の５技能について，学習言語としての運用力を高めることを目標とした。また同上の「未来クリエイト」においては，２年次より外国語（英語）を用いながらの探究型学習を進める計画であり，１年次は担任補佐である外国人教員主導のもと，ＨＲ等を活用し，複数の協働型プロジェクトを実施し，今後に向けた基盤を築いた。

〔f. バランスの取れた体系的なカリキュラムの編成〕

文理選択にかかわらず，「情報Ⅱ」等の発展的な情報にかかわる科目を必須科目として履修するよう教育課程を編成している。ここでは，各コース編成の学びの特徴に従った情報処理能力を育成している。具体的には，持続可能な開発をテーマとした，デジタル技術を活用したものづくりを計画している。

〔g. 工夫された学習活動〕

日本人生徒と外国人留学生が共に探究的に学ぶ機会として，１０月１５日・１６日に，海外連携校であり姉妹校のナザレ校（ポーランド）からの短期留学生と拠点校生徒による，広島での平和学習研修を実施した。参加生徒は２１名であった（短期留学生６名，拠点校生徒１５名）。平和記念公園での学習を踏まえ，研修での学びを深めるための平和に関する探究学習を共同で行い，その成果を拠点校全校生徒に発表した。

〔h. 高大連携による先取り履修〕

事業協働機関である甲南大学と協議を進め，１月に，先取り履修の実施に向けて検討することに合意した協定を締結した。令和７年度に聴講を試行しながら先取り履修実施に向けた具体

的な協議を進める。令和８年度には先取り履修を可能とする取り組みの協定を締結する計画である。

〔ｉ．高度な内容を学ぶ環境の整備〕

令和６年度は世界経済情勢の変化に伴い、計画の遂行を中断せざるを得なかった。令和７年度は当初計画していた「US デュアル・ディプロマ・プログラム」のみならず、高度な内容を学ぶことのできる柔軟な体制を改めて検討する。

４．目標の進捗状況、成果、評価

〔a. イノベーティブなグローバル人材の育成状況〕

本事業で開発する探究型学習カリキュラムについて，以下の 10 の項目に基づいて資質・能力を育成することとした。これらの指標は， 国際バカロレア認定校における学習者像も参考に作成している。指標については検証委員で検討を行い,令和７年度より成果検証を開始する。まずは，本事業で新たに開発している「未来クリエイト」と「日本文化探究」での成果検証ルーブリックとして取り組む計画である。

▸指標１０項目

探究心・多角的視点・創造スキル・論理性・開放性・挑戦心・協働性・表現スキル・知識・内省的態度

〔b. ＡＬネットワークが果たした役割〕

AL ネットワークの形成により， 拠点校が目標を達成するために行う取り組みの充実が図られた。ネットワーク構成員との協議により得られた成果は以下のとおりである。

・管理機関に運営組織を設けたことにより， 運営委員会や検証委員会にて拠点校のみでは得られない専門的な知見を取り入れることができた。

・大学との連携により， 大学教員による講師派遣が行われたり， 先取り履修の協議を始めたりなど，大学との実質的な協働を行うことが可能となった。

・国内連携校との連携により， 探究型学習や海外研修， 留学生受け入れを実施するうえで， 各校の取り組みを活かした協働や研究ができるようになった。

加えて， ネットワークの形成により本構想の意義がネットワーク外にも伝わっており， 今後の構成員増加にもつながると考えている。

〔c. 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の達成状況〕

（１）短期的な目標　令和６年度は計画通り， カナダへの海外研修の実施， 探究型カリキュラムの開発，オフショアスクールから入学する外国人留学生の受け入れを行った。引き続き，左記の教育活動を継続しながら， 令和７年度は台湾への海外研修及び高校生国際会議を実施し，拠点校での本事業の構想の実現を図る。

（２）中期的な目標　令和６年度は連携校と構想の共有をすることができた。令和７年度には連携校間での協議をさらに進め， 協働事業の創出を目指す。また， 令和８年度には， 新規国からの留学生の受け入れを目指す取り組みを行う。

（３）長期的な目標　日本人生徒と外国人生徒を高度人材として育成すべく，大学や行政との連携の足掛かりを付けることができた。令和７年度以降もこれらと協議を継続し， ネットワーク全体で本事業の構想の実現を目指す。

５．次年度以降の課題及び改善点

✔本事業に関する管理機関の課題や改善点

管理機関として，拠点校の取り組みを客観的に評価・検証し，改善点を導き出す体制を構築していくことが必要であると考えている。令和６年度は，カリキュラムアドバイザーの配置や大学からの講師派遣等により専門家を招聘し検証を行った。令和７年度は拠点校からの定期的な報告に対して，より適切な助言ができるよう，管理機関として人員配置等を検討する。その際，構築したネットワークも活用していく計画である。

✔ＡＬネットワークの課題や改善点

AL ネットワーク内での情報共有をわかりやすく円滑にしていくことが必要であると考えている。令和７年度は構築したホームページに随時取り組み状況を掲載する。その際，国内外に情報が発信できるよう，発信言語等に配慮する。

✔研究開発にかかる課題や改善点

研究開発を進めるにあたっての人員確保の必要がある。本事業の構想を踏まえた研究開発を進めていくにあたり適切な人材を選出し，多角的な視点から研究開発を進めることで，将来的な取り組みの拡大を目指していく。また研究開発も念頭に置いた，校務分掌等を検討する。

✔自走に向けた取組（予算確保や人員配置等）と自走の方向性

本構想で育成を目指す，グローバルな高度人材の可能性について姫路市等の地元企業にアピールし資金調達を図るとともに、将来的には外国からの入学生を増加させることで財源確保を目指す計画である。

また，本構想で取り組む，外国からの入学生の受け入れにかかる体制作りにあたっては，姫路市と管理機関で締結している包括連携協定をもとに，官民学で連携した支援制度を構築する計画である。

２ 管理機関の取組み

【１】AL ネットワークの構築

本事業で目指す、城下町という地の利を生かした、日本人高校生と外国人高校生が切磋琢磨しながら高度人材となるという構想を実現するため、今年度、管理機関は拠点校内の人員配置と、国内外の機関との連携を図った。各機関との連携にあたっては、特に留学生の受け入れを進め、留学生の所属する海外の中学校、受け入れ先となる日本の高校、送り出し先となる大学との連携を強化した。詳細については、５章外部連携を参照されたい。

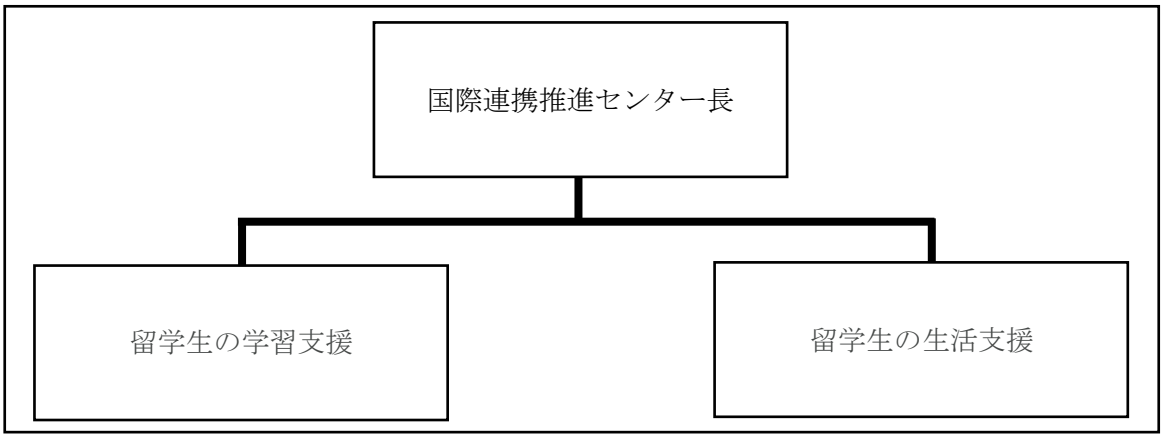
拠点校の留学生受け入れ体制（人員配置）の構築に向けて以下のように組織化を進めた。

・留学生の責任者となる国際連携推進センター長を拠点校の教頭に任命した。

・国際連携推進センター内に留学生の学習支援、生活支援を担当するチームを編成した。

・学習支援チームには、特に日本語教育についての専門家をカリキュラムアドバイザーとして配置した。

図式化すると以下のようになる。



次年度以降に向けた展望としては、チーム内の相互研鑽の充実とその展開が考えられる。今年度は相互研鑽の機会としては、カリキュラムアドバイザーによる日本語教育に関わる研修を限定的に行うことしかできなかった（次項参照）。またチームに所属する教員がその役割を果たしているという認識を持ちながらも、十分な情報共有が困難であった。カリキュラムアドバイザーを交えたミーティングを通じて、「このように関連付けるとより効果的だったのではないか」といった情報が得られた場合もしばしばあった。

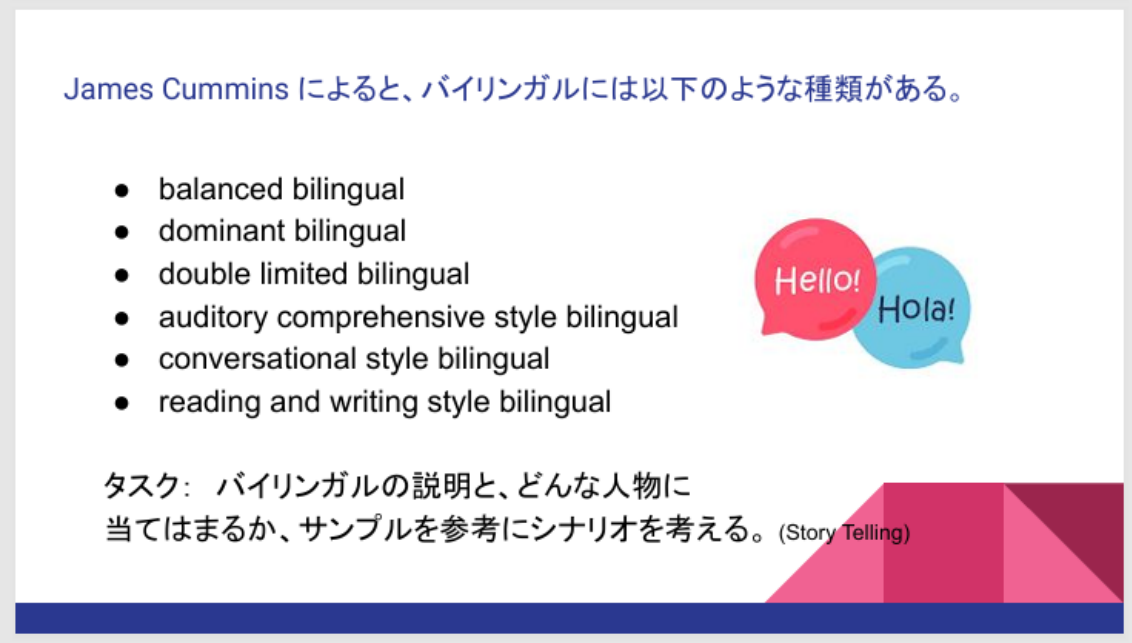
今後は、チームメンバーが定期的に集まる場の設定や、デジタル上での情報共有の仕組みづくりを進めていきたい。また、留学生の受け入れ拡大に伴い、この人員配置から得られたノウハウを学校全体に波及させていくことも視野に入れている。留学生の学習・生活に対して、できるだけ多くの教職員が関心を持ち、支援できる体制を構築することで、全校的な協力のもとでの学校づくりを目指していきたい。　　（文責　上田友梨香）

【２】教員研修

令和６年７月２２日、姫路女学院中学校・高等学校（以下、姫路女学院）において日本語指導の研修が行われた。講師は、Canadian Academy で長年日本語教育を行われている、佐藤奈津先生であった。研修は任意での参加であったものの、日本語の授業担当の教員のみならず、国語科・社会科・英語科の教員や ALT を含む 10 名以上が、2 時間半にわたり研修を受講した。主な研修の内容は、日本語教育の校内の目標を明確にし、その達成のために教員が果たすべき役割を理解することであった。

まず、佐藤先生は、姫路女学院が行うべき日本語教育について、「生徒がバイリンガル・バイカルチュラルになるサポートをすること」だと明確化した。姫路女学院の特色ある科目「教養」では、日本の文化を学び、国際的に活躍する人材の育成を目標としている。この目標を日本語教育の観点から捉えると、単に日本語を話せるようになるだけでなく、日本の文化を理解し、適応できる人材を育てることが求められる。このような「バイカルチュラル」な人材になるための前提として、日本語を使いこなせる「バイリンガル」になる必要がある。

しかし、「バイリンガル」と一言でまとめられている人々には、いくつかの種類が存在している。世間一般がよくイメージする、ある二つの言語のどちらにも堪能であるというバイリンガルは、「バランスドバイリンガル」という理想的なバイリンガルで、このレベルに到達している人はそう多くない。実際には、どちらか一方の言語が支配的で、もう一方の言語は堪能とまで言えない人が多いだろう。場合によっては、言語能力の発達を待たずして言語が変わるなどして、二つの言語のどちらもうまく扱えない人もいる。また、一見して堪能に言語が使えているように思えても、「読む」「書く」「話す」「聞く」の言語の四技能のいずれかに特化したタイプのバイリンガルも存在する。



特に、会話は得意で流暢に話せるものの、読むことや書くことが苦手なタイプは、会話に問題がない分、点数が伸び悩むなどの問題があったとしても配慮を受けられないことが懸念される。他にも、聞くことはできるが話すことが苦手なタイプや、読み書きはできるが会話は難しいタイプのバイリンガルも存在する。このような観点で見れば、英検などを取得しているが、実際に外国に行っても英語を話すことができない多くの日本人も、一種のバイリンガルであるといえる。以上のように、一口にバイリンガルといっても多種多様であり、私たちが受け持つ生徒がどのタイプのバイリンガルであるかを把握していかなければ、生徒それぞれに効果的な教え方を考えることはできない。

それぞれのバイリンガルの特徴をより具体的に把握するために、私たちはグループで話し合いながら、それぞれのバイリンガルのタイプに該当する生徒像を想定し、具体的なシナリオを作成した。具体的な生徒像をイメージしたことで、それぞれのバイリンガルのタイプが、言葉としての定義だけでなく、どのような境遇で過ごしてきたのか、どのような状態の生徒なのかが肉付けされ、より正確な理解ができた。また、日本語以外を母語とする生徒たちの生い立ちから、日本語のどのような部分に不安を抱えている可能性があるか、意識して考えることができるようになった。バイリンガルについての知識が得られたことで、日本語の授業をする際に、一つの技能だけでなく、言語の四技能全体の能力を意識して生徒の様子を見るようになり、また、どの能力を伸ばすか明確に意識して授業を行うことができるようになった。

続いて、佐藤先生は「生徒がバイリンガル・バイカルチュラルになるサポートをする」にあたって、教師に必要な素質は共感性であると述べられた。周囲には不慣れな日本語があふれていて、授業も日本語で進められていく不安を理解し、生徒がどのようなサポートを必要としているかを知ることが、より効果的な日本語教育につながるという考えであった。

共感性を高めるために必要なこととして、参加者は言語習得の難しさを実感するための疑似体験を行った。そこから先、しばらくの間、研修は日本語禁止となり、英語だけで２分間の自己紹介を行うこととなった。指定された紹介の内容は、難易度が高いわけでもなかったが、一部、意味を取り違えるなど、十全な理解ができず、本当に正しいことが言えているのか、不安が大きかった。この経験を通して、日本語の微妙なニュアンスの違いなどを、生徒たちが理解できるように教師側が丁寧に説明しながらサポートすることの重要性を再認識した。また、生徒が質問しやすく、失敗しても受け入れられる環境を整えることが、日本語教育において大きな助けになることを実感した。

多くの教員は、留学などの短期間ですら、母国語以外が支配的な地域で学問を修めようとした経験がない。また、留学をしたことがある教員についても、何年も英語を学んだ後、かなりのレベルの英語能力があると認められたから、留学を許された者が大半である。したがって、日本語を十分に学んだことがない状態で日本にやってきて、日常生活の中で学ぶしかない日本語学習者の困難や苦悩を、真に理解できるものは少ないと考えられ

る。だからこそ、日本語教育に携わる者は、学習者が何に困っているのかを可能な限り素早く正確に理解できるように努めなければならない。その努力が、学習者に対して効率的な授業を行う上でも役に立つことは明白である。

可能であれば、日本語学習者を擁する教育機関全体で、日本語学習者の日常的な困難に目を向けて、適切な支援ができるような体制作りが行われることが望ましい。今回の研修では、直接的に日本語の指導に関わる教員以外も研修を受けている。まだ少数ではあるものの、普段は日本語を学ぶ生徒たちと関わらない教員もその実態を知ることができた。本校がこれから多くの留学生や外国にルーツを持つ生徒を受け入れるために、学校全体で一丸となって取り組む必要があると意識づけられる研修となった。　　（文責　江口裕）

３　拠点校の研究開発の内容・活動実績　（探究型学習）

【１】未来クリエイト

１．概要

中高一貫コースを対象とした、高校１・２年次の２年間を通した講座である。『姫路の観光業が抱える課題』というテーマに対し、課題発見から解決に向けたプロジェクト立ち上げまでの一連のプロセスを実践的に学んでゆくことを目的としている。課題の探究およびプロジェクト立案のために、多角的かつ専門的な知見とノウハウを身に付けるべく、外部から講師を招いている。

１年次は、具体的な課題に取り組むための準備段階として、課題の発見方法、解決に向けたアプローチ方法、マーケティング手法、データの分析手法などのノウハウを身に付けるインプット型の学習が主であった。１年次の終盤には、課題設定に向けて、姫路を含めた観光地の探究学習を行った。２年次では実際に自分たちで設定した課題の解決に向けてプロジェクトを立ち上げ、その成果を披露していく。

２．実施体制

・対象生徒　：　普通科特別進学国際教養コース１年１組１４名（中高一貫生）
・教員　　：　３名
・外部講師　：　一般社団法人 green4 より２名
※必要に応じて他の特別講師を招聘する。

〈一般社団法人 green4 について〉

神社や寺院の緑化を通じた環境保全活動を主としながら、環境保全のための商品開発や地域ブランディングなども行う。また、マーケティングやブランディング、社会との関わり方などを伝える教育活動やワークショップなども行っている。

３．本講座のステップ

※必ずしも以下の順序で進行するものではない。

ＳＴＥＰ１　～働き方を知る～

実際に社会で働く人々のインタビューを通じて、社会との関わり方や、そこから見えてくる文化・歴史・経済・まちづくりなどを学ぶ。

ＳＴＥＰ２　～姫路・地域社会について知る～

姫路市の歴史や町の成り立ちを深掘りし、具体的なデータに基づく分析を踏まえて、社会課題を発見する。

ＳＴＥＰ３　～アウトプットのノウハウを知る～
ワークショップの企画・運営を通じて、企画力ならびにマーケティングやブランディングの手法など、アウトプットの実践的な手法を学ぶ。

ＳＴＥＰ４　～未来クリエイト・プロジェクト～
自分たちで設定した社会課題に対して、具体的に自分たちのアクションを考え、プロジェクトを立ち上げる。

ＳＴＥＰ５　～提案・プレゼンテーション～
企画したプロジェクト内容について、台湾の姉妹校と意見交換を行いブラッシュアップし、最終的に姫路市に提案（プレゼンテーション）する。

４．年間シラバス

回	実施日	実施内容
1	４月２７日	オリエンテーション
2	５月１８日	働き方発見ゼミ　～「働く」のイメージ
3	６月　１日	働き方発見ゼミ　～両親へインタビュー
4	６月１５日	ＳＤＧｓ石鹸について
5	６月２９日	働き方発見ゼミ　～働く人へインタビュー
6	７月　６日	
7	９月　７日	イベント計画・準備 （文化祭・あいめっせフェスティバルに向けて）
8	９月２１日	
9	１０月５日	
10	１０月１９日	特別講義～アンケートの意義と有効なアンケートの作成法について
★	１０月２５日 ２６日	文化祭 ～ＳＤＧｓ石鹸ワークショップ１
11	１１月２日	文化祭の振り返り
12	１１月１６日	特別講義　～データ分析とマーケティング
★	１１月２３日	あいめっせフェスティバル　～ＳＤＧｓ石鹸ワークショップ２
13	１１月３０日	あいめっせフェスティバルの振り返り
14	１２月７日	観光地分析　～姫路のＳＷＯＴ分析
15	１月２５日	観光地分析　～他の観光地との比較
16	２月１３日	リベラルアーツフェス準備
★	２月１４日 １５日	リベラルアーツフェス　～プレゼンテーション

５．実施内容

本年度の実施内容は大きく「働き方探究」「ＳＤＧｓ石鹸ワークショップ」「アンケートの作成と実施」「データの分析」「リベラルアーツフェスでの発表」「観光地分析」の６つに分けられる。

〈働き方探究〉

外部講師である green4 が制作した職業インタビュー映像を視聴し、さまざまな職業の人々の社会との関わり方や職業に対するリアルな声を聞き、「共感できる部分」「疑問・違和感を抱いた部分」等を挙げながら「働く」ということに対する理解を深めた。また、生徒自身が地域の職業人にインタビューをするという設定でインタビューの手法を学んだ。インタビューにおける礼儀作法や役割の分担、質問内容の考え方や話を広げるための会話法などを学んだ。また、身近な職業人へのインタビューということで、自分の両親に対してのインタビューも行った。時間の都合上、実際の訪問インタビューは割愛したが、今後のインタビューに活かせるノウハウを身に付けることができた。

〈ＳＤＧｓ石鹸ワークショップ〉

green4 が開発に携わった美容石鹸の販売および手作り体験ワークショップを通じ、マーケティングおよびブランディングの手法を学んだ。この石鹸は環境にも使用者の健康にも配慮されたものであり、それらを購入者・ワークショップ参加者に効果的に伝え、購買意欲を高める方法などを学んだ。また、材料の原価や人件費、利益などを考慮したうえで価格を検討し、売り上げ目標を設定するなど、マーケティングの基礎を学んだ。石鹸の販売および手作り体験ワークショップは本校文化祭および、姫路市等が主催する男女共同参画推進イベント「あいめっせフェスティバル２０２４」にて実施した。本校文化祭での実施後には、売上や顧客アンケートの結果をもとに反省・分析を行い、内容をブラッシュアップした。その成果をもって、一般来場者の多い外部イベントであるあいめっせフェスティバルに臨んだ。

図１　green4 の講師からＳＤＧｓ石鹸の説明を受ける

図２　文化祭での販売に向け石鹸を作製する

図 3　文化祭に向けて配布するチラシを作成した

図 4・図 5　あいめっせフェスティバルの様子

〈アンケートの作成と実施〉

上記のように、石鹸販売・手作り体験ワークショップの際、利用客に対してアンケートを行った。内容は、販売・ワークショップのサース向上を目的とした満足度調査と、今後の地域観光に関する探究活動の参考とする、姫路市に対する地域住民の意識調査を兼ねていた。アンケート作成にあたり、甲南大学の石川隆士教授を講師として招聘し、特別講座を実施していただいた。アンケートを実施する意義をはじめとして、適切で回答しやすい質問項目の検討方法、気軽に回答してもらえるフォーマットの工夫など、専門的な内容を学ぶことができた。

姫路女学院高等学校　石鹸づくりワークショップアンケート

～姫路市に対する印象について～

私たちがこれから学習することの資料として使わせていただきます。
ご協力、石鹸ワークショップの参加、本当にありがとうございます。

○あなたの年齢はいくつですか？
□1～9歳　□10～19歳　□20～29歳　□30～39歳　□40～49歳　□50～59歳　□60歳以上

○姫路に住んでいますか？
□はい　□いいえ

○はいと答えた方に質問です。住んで何年ほど経っていますか？
□1年未満　□2～5年　□5～10年　□10～20年　□20～30年　□30年以上

○いいえと答えた方に1つ目の質問です。姫路には何度訪ねてくださっていますか？
□1回　□2回　□3回　□4回　□5～9回　□10回以上

○いいえと答えた方に2つ目の質問です。何を目的として姫路を訪ねてくださりましたか？
できるだけ多く書いていただけると嬉しいです。（姫路城、何かのイベント、など）
（　　）

○姫路に住んで、または何度も訪ねてくださったことで印象は変わりましたか？
□はい　□いいえ　□初めて訪ねた

○はいと答えた方に質問です。印象はいつ頃から、どのように変化しましたか？
（　　）

○いいえと答えた方に質問です。どのような印象を変わらず持っていますか？
（　　）

○初めて訪ねた答えた方に質問です。今回初めて姫路に来てどんな印象を受けましたか？
来る前の印象と違いがあれば教えていただけると嬉しいです。
（　　）

○姫路は観光地として発展していると思いますか？
□はい　□いいえ

○姫路といえばどんな観光地を思い浮かべますか？（複数回答可）
（　　）

○姫路の改善してほしいところはありますか？（複数回答可）
あってほしいものや、してほしいイベント、不便なことなどを教えていただきたいです。
（　　）

○このアンケートについて
□答えやすかった　□答えにくかった

○答えやすかったと答えた方に質問です。よかったと思ってくださった点を少しでも書いていただきたいです（複数回答可）
（　　）

○答えにくかったと答えた方に質問です。どんな点が答えにくかったと感じた点を教えていただきたいです。（複数回答可）
（　　）

ご協力ありがとうございました。

図６　あいめっせフェスティバルに向けて作成したアンケート

〈データの分析〉

アンケート実施後、収集したデータをマーケティング的視点から分析するため、再度甲南大学の石川教授を講師に招き、特別講座を実施していただいた。講座では特に、アンケートとマーケティングには深い関わりがあることを強調して教えていただき、限られた回答データから有益な情報を読み取る術を学ぶことができた。また、マーケティングにおける分析手法のひとつとして「ＳＷＯＴ分析」というものを教えていただいた。これは、分析対象の持つ性質を強み（Strengths）、弱み（Weaknesses）、機会（Opportunities）、脅威（Threats）の４つに分類し、他者の性質と比較することでマーケティングの戦略を

立てる、というものである。この講座内容から、姫路市の観光を探究する際に、他の観光地と比較分析するという着想を得ることができた。

６．成果

〈リベラルアーツフェスティバルでの発表〉

探究学習の成果披露の場である校内行事「リベラルアーツフェスティバル」において、本講座のこれまでの学習成果を発表した。学習内容や成果はもちろん、これらを学習する意義や、マーケティング・ブランディングの基本的な考え方、課題や今後の展望を織り込んでプレゼンテーションを行った。専門的な内容を分かりやすく整理し、相手に伝わるよう意識した発表により、本講座の学習内容を知らない他学級・他学年にも分かりやすく伝えることができた。

図７　リベラルアーツフェスティバルでの発表の様子）

〈観光地分析〉

２年次には、姫路の抱える具体的課題を探究していくことになるが、それに先駆けて姫路の観光の現状を調査し分析を行った。姫路の観光の特徴を、ＳＷＯＴ分析を用いて分析した。また、各自が姫路以外の観光地を１か所ずつ決め、その観光地の特徴と比較することで、姫路がどのような点を伸ばしどのような課題を解決しなければならないのかを明確にした。自分が興味を持つ観光地と比較することにより、姫路が抱える課題をより身近に感じることができた。

７．次年度に向けて

２年次となる来年度は「具体的な」活動へと発展していく。すなわち、姫路の観光業が抱える「具体的な」課題を設定し、それらを裏付ける「具体的な」歴史的背景やデータを検討し、自分たちが起こせる「具体的な」アクションを定め、それに向けてプロジェクトを

企てていくのだ。本年度のプログラムで培った技能やノウハウを活かし、独自性に富んだプロジェクトを生み出せるよう、効果的にサポートしていきたい。また、本学級は修学旅行にて姉妹校である台湾の国立基隆女子高級中学を訪問することになっている。修学旅行までに、自分たちの住む地域の探究をそれぞれ行い、その成果を披露し交流する予定である。自分たちの意見や案を効果的に提案する場としつつ、文化の異なる同年代の生徒の視点を取り入れ、その後の探究活動の視野を広げたい。さらに、最終的には、自分たちが企画したプロジェクトを姫路市に対してプレゼンテーションにて発表・提案し、企画書を提出する予定である。なるべく具体的かつ実現性のある企画を作り上げ、実際にプロジェクトとして採用・実現されることを目標に内容を磨けるよう支援していく必要がある。

（文責　髙嶋志）

【2】日本文化探究

１．概要

外国からの入学生等を対象とした学校設定科目として、姫路の地域探究を３年間通じて行う、「日本文化探究」についての研究開発を行っている。今年度は、高校１年生を対象とした年間シラバスの作成を行った。１年次の主な目的は、探究型学習に必要な基礎スキル等を育成することであった。そのため、テーマに沿った探究を進めると同時に、インタビュー結果報告、プレゼンテーション、ポスターセッションなど様々な様式での発表を取り入れた。成果として、探究型学習と言語学習を組み合わせたカリキュラムとして発展的に作ることができた。次年度は、他科目との連携をさらに行うことで効果的な言語学習を探ると同時に、地域探究を実践的に行う計画である。

２．目的

本カリキュラムは、外国からの入学生が高校卒業後に日本の大学に進学し、日本社会で活躍する高度人材となることを期待し、学習のための日本語スキルを育成するとともに、地域理解及び地域への愛着の醸成を図ることを目的としている。さらに、本カリキュラムにおける探究型学習の成果を活かした、大学への進学をも視野に入れている。

３．実施体制

・教員（英語科）２名、補佐（ALT）１名

・生徒７名

生徒７名は、留学生が３名（インドネシア ２名・中国１名）、外国にルーツのある生徒が４名（フィリピン２名・ネパール１名・中国１名）であり、日本語力については、年度当初、留学生は初級、外国にルーツのある生徒は中級であった。

４．年間シラバス

＜１学期＞

実施回	概要	ねらい
4/15	オリエンテーション	導入①
5/1～	日本の年間行事	導入②
6/11～	浴衣についてインタビュー	課題設定→質問に答える力・マナーを学ぶ
6/29	＜特＞浴衣を着てみよう	文化体験
7/2～	インタビュー結果をまとめる	発表をする。伝聞表現を使う

＜２学期＞

9/7～	茶道について探究	課題設定→情報収集→整理・分析の過程を学ぶ
9/24	茶室見学	導入・文化体験
11/12～	調べた内容をプレゼンテーションで発表	探究内容の表現方法を学ぶ①

＜３学期＞

1/14～	調べた内容をポスターで発表	探究内容の表現方法を学ぶ②
2/4	校内ポスターセッション	実践
2/19	＜特＞日本語で校舎案内をしよう	※海外姉妹校来日に合わせて実施
2/25～	ひめじ探究	課題の設定
3/20	＜特＞校外ポスターセッション	実践

５．実施内容詳細

＜１学期＞

浴衣についての探究　～インタビューを用いて～

日本文化の一つとして、浴衣についての探究を行うこととした。生徒の日本語力を考慮し、文字情報の整理は困難であると判断し、教員へのインタビューを通じて、浴衣についての探究を進めた。具体的には、浴衣の好みから浴衣文化に対する考え方まで幅広い内容を質問項目として設定し、教員から回答を回収した。その際、正しい日本語で話すことのみならず、敬語も含めた丁寧な日本語で話すことを指導した。インタビューの結果は、「〇〇先生は～～と考えるそうです。」という伝聞表現でまとめて発表した。この活動により、言語活動をしながら、浴衣という一つの日本文化についての理解を深めた。

＜２学期＞

続いて、日本文化の一つとして、茶道についての探究を行うこととした。１学期を経て日本語力に向上が見られたことから、文献調査を通じての探究とした。深く調査研究を行う

ためには、自身の母国語に頼らざるを得ない。しかしながら、それでは日本語力につながらない。そこでその際に心がけたことは翻訳に頼りすぎないように導くことである。例えば、課題設定の際には、やさしい日本語で書かれた茶道についての文章を取り上げ、そこから興味関心を探索させた。また、探究の過程では、その進捗を日本語で要約させ、探究内容を常に日本語で理解するよう促した。これにより、内容を日本語で理解しながら探究を進めることができ、発表にあたっても円滑に進めることができた。２学期の発表はプレゼンテーションにて行った。スライドの作成と発表原稿について、言語学習の観点も交えながら指導を行った。

＜３学期＞

１年間の集大成として、２学期の探究内容をポスター形式にて発表した。ポスター作製と発表原稿について、２学期と同様に指導を行った。特にポスター発表にあたっては質疑応答の場面についての指導を重視した。発表にあたっては他クラスの生徒の国語の授業と合同で行い、様々な視点でのコメントを取り入れ、生徒の学びにつなげた。さらに授業外の取り組みとして、兵庫県への出展（代表生徒１名）、また姫路市高校生グローバルサミットへの出展（５名）を行い、対外的な成果発表の機会も設けた。

＜そのほか＞

特別授業として、１学期には浴衣の試着体験、２学期には茶室見学、３学期には茶の湯体験を行い、探究課題を体験的に学ぶ機会を設けた。また、３学期には、姉妹校の韓国・啓星高校の来校に合わせ、相手側の日本語への関心の高さから、日本語での校舎案内を行った。日本語での実践的なコミュニケーションの場として、生徒たちはこれまでの学びを活かす経験を得ることができた。

６．成果と課題

外国からの入学生受入れ初年度であり、「探究型学習」×「言語学習」という掛け合わせをどのように進めていけばよいかは毎回が手探りであった。しかし生徒は探究型学習と言語スキル（日本語）の基礎を身に付けることができたと考えている。今年度の取り組みを通じて、探究型学習において重要な、教員もともに学ぶという考え方を持つことが大切だと改めて感じた。すなわち、自身が生徒の立場で探究を進めているとしたら何をするだろうかと考えるということだ。そして、この洞察から得た過程に向かって考えるよう、生徒に問いかける。この繰り返しが、教員もともに学ぶということなのだ、と考えるようになった。本カリキュラム開発における特色は、探究型学習を体系立てて進めることで探究型学習の基盤を作るのと同時に、言語学習を行うことである。言語学習においては、生徒のレベルを鑑みて必要な指導を行った。第二言語習得の観点からは、英語指導と共通する部分もあり、教員のバックグラウンドを活かすこともできたと考えている。

課題としては、他のカリキュラムとの連携が挙げられる。探究型学習、日本語教育ともに同時並行で行っているカリキュラムがあり、それらとの連携は十分にとることができな

かった。特に、日本語教育においては、言語習得にあたって反復学習が重要となることから、科目間の連携が望ましい。カリキュラムアドバイザーと連携した、日本語科の体制づくりが急務である。

７．今後の展望

次年度は、２年次のシラバス作成、および１年次のシラバスの修正を行っていく。課題として記載したように、特に日本語の科目間の連携を心がける。また、本カリキュラムの目的である、地域理解や地域への愛着の醸成のための取り組みは２年次より本格化する。校内の学びにとどまらず、地域社会と連携しながら、シラバス作成に取り組んでいきたい。また同時に、今年度作成したルーブリックを活用し、本カリキュラムが生徒の学びに与えた影響を検証し、研究を深めていきたい。　　（文責　上田友梨香）

図１　茶道についてのプレゼンテーション

図２　茶室見学の様子

【３】カナダ海外研修

令和６年９月２６日から１０月３日の日程で、中学３年生を対象としたカナダ修学旅行を実施した。７泊 8 日と短い日程の中で、多文化を理解し多文化共生の態度を養うこと、様々な経験を通してグローバルな視点を養うこと、英語学習への意欲関心を高めることを目的として、実りある研修を目指した。

１．　事前学習

総合的な学習の時間を用いて事前学習を行った。初めての海外旅行である生徒も多く、日本と海外の違いについて、ほとんど理解がない状態であった。そこで、中学２年生から３年生にかけての春季休業を利用し、カナダについての調べ学習を行った。インターネット上の情報だけであるが、カナダへの興味関心を高めるためきっかけとなった。調べたことを Canva や PowerPoint を用いたプレゼンテーションを通して学びを共有した。文化や食生活、気候や時差など、多様な視点からの発表は、生徒同士の学びをさらに広げる機会となった。その後の授業では調べ学習の中で特に生徒たちが興味関心を抱いた食文化と生活習慣について深掘りをした。

⑴　カナダの食文化を知る

多民族国家であるカナダにとって、カナダ独自の食文化を挙げることは難しい。そこで、カナダの代表的な料理であるプーティンとスモアに目を付けた。インターネット上の写真だけでなく味も確認したいという意見も出て、実際にプーティンとスモアを作り、試食して理解を深めた。食べた結果、「美味しいがたくさん食べられない」「非常に甘い」「カロリーが高そうな味」といった感想を口にした。インターネット上の情報とほぼ同じではあるが、実際に作って食べたことによって得られた感想であるので、生徒にとって印象深いものになった。さらに食文化の違いをより感じるために、日本のお弁当文化について学んだ。夏季休業を利用しお弁当作りに挑戦した。この取り組みによって、日本のお弁当文化を紹介したいという気持ちと海外の昼食を体験したいという気持ちが高まった。

⑵　カナダの生活習慣を知る

学級の補佐である ALT がカナダにルーツを持つことから、生徒たちは ALT の父親へのインタビューを通じて、学習を進めた。生徒の質問内容は基本的な情報もあったが、調べ学習だけでは理解ができなかった生活習慣や食文化など幅広くあった。新たに得た知識をまとめることで、事前学習をより深めることができた。

２．　現地での様子

⑴　スターバックス（シアトル本社）

カナダに入国前にシアトルに立ち寄った。シアトルではスターバックスの１号店の外観を見学した後、本社で昼食や買い物、コーヒーの飲み比べなどの勉強をした。まずスター

バックスに入店すると、シアトル限定のグッズに目を輝かせ、ためらうことなく英語を使って会計に進んでいく姿を見ることができた。事前学習でスターバックスのメニュー表を見ながら英語を使って買い物をするケーススタディーをしていたこともあり、スムーズに買い物を済ませることができた。事前学習の成果が発揮された場面だった。また、会計後に使用した金額を見て思ったよりも高かったので、日本より物価が高いことに気づくことができたようであった。アメリカは日本よりも物価が高いことは学習済みであったが、実際に体験することで、異なる経済状況をより具体的に理解する貴重な機会となった。

⑵　ホストファミリーとの生活

今回の修学旅行の大半の時間を過ごすホトファミリーは生徒たちにとっては大切な存在である。特に今回は土曜日と日曜日の休日二日間を一緒に過ごすことになるので、事前学習で連れていってもらいたい場所を考えたり、ホストファミリーの家族構成の情報を知って、お土産を考えたりするなど期待半分、不安半分で準備を進めた。

実際に海外の家庭に入り生活を共にする経験をし、多くの学びを得ることができた。より強く学びの成果を感じたところは、積極的な英語での会話であった。英語が流暢になったといった学力の向上とまではいかないが、理解しよう、伝えようと必死になる姿が見られた。ジェスチャーを交えながらでも伝わることがある、不十分な英語でも理解しようとしてくれる、間違えても笑顔で対応してくれる、このようなホストファミリーの姿勢が生徒たちの気持ちを和らげ、積極性の向上につながったと考えられる。もちろん良い経験ばかりではないが、気持ちが伝わらず困ったことや悲しかったこともすべて含めて素晴らしい経験ができたと感じている。

⑶　Pacific Academy の生徒との交流

Pacific Academy を訪問し、カナダの学校での授業の体験をした。幼稚園から高校までの一貫校で、高校生に当たる学年の生徒たちと交流を行った。交流をした日が Orange Shirt Day の前日であり、カナダの先住民の方々が受けてきた差別について一緒に学ぶことができた。海外でも日本と同じように先住民に対する差別があったことや、その過去を忘れないための祝日が設けられたことなど学ぶことができた。また、バディの選択している授業に参加し、海外の授業の特徴を知ることができた。日本の授業とは違い、生徒が主体的に考えて行動している姿に大きな衝撃を受けたようだ。一方で、英語力が足りないことを再確認する場ともなったようだ。放課後には校庭で一緒にスモアづくりを体験し、楽しい時間を過ごした。

⑷　MLI のバディとの交流

事前学習で最も多くの時間を割き、生徒たちが主体的に考えて準備を進めた企画が MLI のバディとの交流であった。日本文化の素晴らしさを知ってもらうためには自分たちが日本文化の素晴らしさを知る必要がある。中学１年生から教養の時間で日本人の立ち居振る

舞いの素晴らしさや継承すべき日本文化など学んできた。それに加え３年生では茶道体験や華道体験を経験した。調べて学ぶ日本文化ではなく、３年間を通して体感することで得られるのが日本の文化だ。体得したことを生かしてプレゼン内容を考えた。紹介の内容は日本の食文化、遊びの文化、神社仏閣、城など多岐にわたった。英訳に苦労しながらもALTの力を借りながら文章を作成した。
最も盛り上がったのは、折り紙と日本のお菓子の紹介であった。折り紙は言語が伝わらなくても手元を見てもらうだけで折り方を伝えることができる。日本人の持つ器用さや丁寧さが伝わったと感じた。また、日本のお菓子を実際に食してもらうために、きな粉のお菓子、抹茶のお菓子、グミ、ラムネなどを持参した。どのお菓子も好評で、自然と会話も弾んだ。

⑸　Van Artsでのワークショップ、ウォルトディズニーアニメーター園田さんとの交流

午前中はメディア系の専門学校であるVan Artsで授業見学をした。アニメやゲームに興味関心を持つ生徒が多く、制作の過程を楽しみながら見学することができた。難しい内容ではあったが、知っているアニメのポスターやイラストを見ると大きな反応を見せていた。特に、日本のアニメキャラクターがホワイトボードに描かれていたことに、生徒たちは大きな反応を示した。日本のアニメがカナダでも受け入れられていることを実感することができたようだ。午後からはウォルトディズニーアニメーターの園田さんと交流を行った。ディズニーアニメの『モアナ2』の制作でお忙しい中、アニメが出来上がるまでの過程やアニメーターになった理由などを教えていただいた。終始和やかな雰囲気で交流することができた。

総合的な学習の時間で中学１年生と２年生の時には演劇の学習を、3年生では映像制作や立体映像、映像効果の学習を行っており、これらの学習を通じて培った視点が今回の見学や交流をさらに意義深いものにした。夢のある仕事を目前にし、生徒たちの学びに対する姿勢に変化がみられることを期待している。

３．　課題と今後の展望

修学旅行を中学３年間の学びの集大成と位置づけ、事前学習から学びを深めてきた。しかし、現地に赴かないと分からないことも多々あった。その一つは自立心の育成である。海外の生徒は日本の生徒よりも自立していることは教員側も生徒側も理解していたが、困難に直面したときの解決力の乏しさが随所で見受けられた。計画外の出来事に対して主体的に動けないことや、困難に直面した際にすぐに他人に頼る場面が見受けられた。言語の壁にとどまらない、問題解決能力を養う必要性を感じた。

現在、生徒は修学旅行の事後学習として、カナダと日本の文化の違いや修学旅行での学びをショートムービーやスライドにまとめている。

今後も修学旅行で得た貴重な体験が、課題として認識した自立心や英語力の向上につながるように指導していきたい。　（文責　小林聖代）

【4】広島研修

本研修の目的は、ポーランド生徒との交流の中で、広島にて平和学習を両校の生徒とともに行うことである。広島原爆ドームを訪れたり、厳島神社を参拝したりすることで、平和の大切さや戦争の悲惨さを学び、考える機会となる。また、日本が経験した戦争の歴史やそこからの復興の流れなどをポーランド生徒に知ってもらい、ともに平和を誓うもの同士が語り合う場ともなる。海を隔てた遠い国の高校生同士が、平和への想いを共にする研修となる。

１．　概要

今回の研修は、令和６年１０月１５日、１６日の二日間かけて行われた。本校は、中学生５名、高校１年生１名、高校２年生６名、高校３年生１名、インドネシアからの短期留学生２名、本校教員２名が参加した。前述の通り、ポーランドのナザレ校生徒との交流を含めるため、ポーランド生徒６名、教員２名も参加し、計２５名となった。本校は、ポーランドのナザレ校と提携しており、令和６年５月に本校生６名がポーランドへ渡航し、アウシュビッツ収容所などを訪れ、ポーランドでの平和学習を行なっている。この６名は本研修にも参加し、ポーランド生徒と日本での戦争について考える機会となり、お互いの国同士がそれぞれで起こった戦争について知り、ともに平和とは何かについて理解を深めた。

２．　実施内容

広島に研修へ行く前に事前学習を行なった。当時の被爆者の方の話を動画にて視聴し、広島研修で探究するトピックについて各班に分かれて考えた。そのトピックについて広島で探究し、最後、全校生の前で発表する形となる。

広島研修１日目は、平和記念公園、広島平和記念資料館の見学、大学生による原爆ドーム付近の案内、千羽鶴作成を行なった。広島研修２日目は、広島平和記念公園にて千羽鶴の奉納を行い、フェリーに乗り、宮島へと向かった。その後、厳島神社を参拝した。

事後学習として、全校生の前で、事前学習に決めたトピックについて各班で学び考えた内容について披露した。ポーランド生徒、本校生がペアとなり、英語での発表後、日本語での翻訳を行った。

図１　厳島神社での集合写真

図２　千羽鶴の奉納の様子

３．　成果

事前学習では、各班が被爆者の話を聞き、広島研修へと向かう心構えができた。また、それぞれの班が広島研修での主な学びのトピックを探し出し、具体化することができた。

広島研修１日目では、生徒たちが、原爆ドームを初めて見学し、原爆が起きた当時の様子が想像できるほど、物々しい雰囲気を感じていた。続いて訪れた広島平和記念資料館では、戦争の流れや戦時中の人々の様子、原子爆弾の威力や製造過程、原爆による被害者の当時の状況やその後などを知ることができた。展示されている資料や動画、画像を事細かに見る生徒が多く、当時の状況を間近に感じることができた。その後、大学生による原爆ドーム付近の案内が行われ、原爆の被害状況や復興の流れなどの説明があった。また、被害に遭われた仕事場の見学を行い、当時の状況を実体験する機会となった。案内後に、広島平和記念資料館、原爆ドーム付近の案内で見聞きした感想をポーランド生徒、本校生とお互いに言い合い、戦争、平和に対する考え方などを共有した。実際の生徒意見として、「原爆が起きた当時の様子を知ることができ、戦争の悲惨さや平和の大切さが分かった」「今の広島は、多くの人の協力により、戦争から復興することができたことが分かった」「戦争で起こったことや悲しんだ人がたくさんいることを後の世代に引き継いでいくことも大切だと思い、機会があれば私も家族や子供たちに伝えていきたいと思った」などが挙げられた。平和記念公園、広

島平和記念資料館を見学した後には、これからの平和を願い、日本の生徒、ポーランドの生徒ともに千羽鶴を折った。

広島研修２日目では、まず、広島平和記念公園にて千羽鶴の奉納を行った。ポーランド生徒、本校生が平和について祈り、ともに千羽鶴の奉納をした。その後、フェリーに乗り、宮島へと向かい、厳島神社へ参拝に行った。広島研修の中では、ポーランド生徒と本校生が交流する機会が多くあり、平和に関する考え方などの共有を行なった。ポーランド生徒から本校生に戦時中のことについて質問する様子も見られ、互いに戦争のことについて考える機会が得られた。

図３・４　広島平和記念公園での様子

事後学習では、ポーランド生徒と本校生がペアとなり事前学習で決めたトピックについて全校生徒の前で発表した。ポーランド生徒、本校生が広島研修において得た知識や体験をもとに他の生徒へと伝わりやすいようにプレゼンを作成していた。発表内容としては、原爆投下による被害、戦後の復興の流れ、ポーランドでの戦争時での出来事などであった。ポーランドの生徒と協力することで、広島研修で学んだことやポーランドの戦争時の様子について互いに共有することができ、戦争について深く考える機会となった。

４．　課題と今後の展望

今回の広島研修を通して挙げられた課題は、本校生の英会話能力の向上の必要性である。ポーランド生徒との交流を行うにあたり、ポーランド生徒は二言語を扱うことができていたが、本校生は十分に自分の考えを伝えきれない場面も見られ、英語力の向上が求められると感じた。今後の展望としては、英会話能力の向上を行い、ポーランド生徒との会話の質が上げられるような授業を展開する必要がある。

５．　所見

広島研修に参加した生徒にとって、今回の経験は大きなものとなった。滅多にすることはないポーランド生徒との交流の中で、ともに戦争や平和について語り合い、意見交換することは今後の人生においてもほとんどないと思えるほどの貴重なものである。また、広島へ訪れ、原爆ドームや広島平和記念資料館を見学できたことで戦争の悲惨さや平和の大切さを痛感することができ、知識や経験が深まったと感じる。現代社会においても戦争が行われる中で、それぞれの生徒が将来、戦争に直面した時にどのような考えを持ち、どのような行動を起こすのか、生徒たち自身の選択が迫られた時にこの経験がより良い将来を形作れるものになれるよう願う。　（文責　永田悠真）

【５】ハワイ短期語学研修下見

日程:2024 年 9 月 26 日～30 日

第 1 回 アメリカ・ホノルル市への事前学校訪問調査

１．　概要

拠点校の教育理念である「国際教養人の育成」を実現するためには、英語を主要な学術言語とする国において、同じ目的を共有する教育機関と関係との連携を築くことが不可欠だ。その一環として、ホノルルの女子校 3 校を事前に訪問し、学校交流プログラム設立の可能性を探ることにした。国際教育を推進する現実的な手法のひとつとして、生徒たちに英語を集中的に使用する環境を提供し、多文化に触れる経験を提供することが挙げられる。多文化環境で知られるハワイは、生徒たちが異文化を直接体験しながら語学力を向上させる場として理想的な場所である。さらに、Hawaii Pacific University のアドミッション・ディレクター補佐を訪問し、同大学の教育プログラムに関する貴重な情報を得る機会を持った。

２．　方針：

①没入型言語体験の環境を確認する

・生徒に本物の英語環境を提供し、語学力の向上を図ることができるかどうか。

・ハワイの多文化社会において、学問的・社会的な場面で実践的に英語を使用することで、流暢さやコミュニケーション能力を向上させることができるかどうか。

②拠点校の教育方針とプログラムの合致を確認する

・言語習得だけでなく、多文化理解と国際的視野を養うことを重視するプログラムか。

・国際社会で活躍できる人材の育成という教育方針と合致するか。

③パートナーシップ校を構築する
・文化の多様性を深く理解するため、ハワイの教育機関との長期的な関係を築く。
・計画的な訪問、協力的なプログラムの開発、学校間の継続的なコミュニケーションを推進する。
「文化のるつぼ」であるアメリカ、特にハワイ州の学校と関係を築くことは、文化の多様性への深い理解を育み、国際的な視野を持つ人材の育成に置いて重要である。そのためには、計画的な訪問、協力的なプログラム、そして学校間の継続的なコミュニケーションを行うのが不可欠である。
④大学との連携を探る
・拠点校の生徒にとって、Hawaii Pacific University は有望な進学先である。入学ルートや留学支援に関する具体的な協議を進め、より明確な連携体制を構築する。

３．　実施内容
・日本のインターナショナルスクール関係者からの情報、インターネット調査、及びハワイの私立校に関する予備知識を基に、訪問候補校を選定。
・ホノルルの女子校 3 校を訪問し、各校の管理者と面談を実施。
・交流プログラムが拠点校の生徒の教育経験をどのように豊かにできるかについて、各校から理解と賛同を得ることに成功。

４．　成果
　このプログラムは、文化交流を通してグローバルな視野の育成に重視を置いている。語学力を向上だけでなく、多文化や国際的な視点への理解を深めることで、国際社会で活躍できる人を養うという拠点校の教育方針に合致している。
・訪問の目的であった学校交流プログラムの可能性について、3 校すべてに適切な提案を行うことができた。
・拠点校の教育方針や特徴について情報を発信・共有し、連絡先を交換。今後の協力関係構築の基盤を築いた。
・2025 年 3 月までに、各学校長とのフォローアップ会合を実施することで合意。

５．　課題
　訪問校の中には、低学年が男女共学の学校もあることが判明。交流プログラムに男子生徒を参加させる可能性について言及されたが、現行のカリキュラム構成や会場の都合上、慎重な検討と準備期間が必要であると認識。

６．　今後の展望：
　訪問校の一つである Sacred Hearts Academy と拠点校との交流で得られた前向きな成

果を踏まえ、次のステップでは、持続可能でお互いに有益な交流プログラムの正式な実施に焦点を当てるべきである。計画には以下の内容が含まれる

・試験的プログラムの実施：少人数の生徒によるパイロットプログラムを開始し、実現可能性を検証する。

・文化交流プロジェクトの開発：オンライン交流や共同研究など、多文化理解を促す共同プロジェクトを企画・実施する。

・交流プログラムの枠組み策定：訪問期間、学業との連携、課外活動などを考慮し、具体的なスケジュールを構築する。

・教員間の協力促進：教育実践や知見を共有するため、教員間における継続的な対話を推進する。

・評価と改善：フィードバックを通じてプログラムを改善し、今後の発展とパートナーシップを拡大する可能性を探る。

日程:

2025 年 1 月 22 日～24 日

第 2 回 アメリカ・ホノルル市での学校訪問の総括

１． 概要

Sacred Hearts Academy と Hawaii Pacific University の訪問

・3 ヶ月前の初回訪問のフォローアップとして実施。

・Sacred Hearts Academy が校長面談を提案し、春休み中の生徒訪問が具体化。

・短期および長期の交換留学プログラムへの参加招待を受ける。

今回の訪問は、3 ヶ月前の初回訪問に対するフォローアップとして行われた。特筆すべき進展として、第一候補であった Sacred Hearts Academy より両学校長の面談日の提案があったことが挙げられる。この進展により、春休み中の生徒の初訪問が具体化し、1 日のプログラムおよび生徒バディの手配がされている。また、同校からは短期および長期の交換留学生向けプログラムへの参加招待も受けた。

２． 方針

初回訪問時のアプローチを継続し、国際的な交流と多様な教育機会を通じて、学問的な成長だけでなく人間的な成長をも目指す。

３． 実施内容：

・Sacred Hearts Academy の校長との面談を実施。

・拠点校の教育方針の一つ「教養」に対し、現地教員が関心を示す。

・Hawaii Pacific University 副学長との初回ミーティングにおいて以下の協議を実施。

①拠点校卒業後の推薦先となる可能性

②高校生向け「HPU 600」クラスの単位認定

③大学が主催している短期プログラムへの参加

④TESOL プログラム大学院生の実習先として拠点校を提供する可能性

Sacred Hearts Academy と拠点校両校長との面談は、現地エージェントの協力のもと、実りあるものとなった。Sacred Hearts Academy では、拠点校が掲げる教育方針の一つである、「教養」に対し、複数のメンバーが関心を示し、拠点校の教育に深い興味を抱いていた。Hawaii Pacific University との初回ミーティングは有益なものとなり、その後の協議として国際連携推進センター長との Zoom ミーティングを２月１４日に実施した。

４．　成果：

・Sacred Hearts Academy とのパイロットプログラムを 2025 年 3 月 26 日に実施することで合意。

・Hawaii Pacific University との協議では、MOU（覚書）の提示が予定され、3 月 27 日に本校生へのキャンパスツアーが計画された。

Sacred Hearts Academy とのミーティングでは、拠点校の生徒を受け入れるパイロットプログラムを 3 月に実施することで合意が得られた。両校ともこのプランに同意し、エージェントが両校の連絡役を務めることとなった。日程は 3 月 26 日（水）に決定した。

Hawaii Pacific University との話し合いは、両校にもたらす可能性のある協力成果についての相互理解を深める形で終了した。 Hawaii Pacific University は、今後の検討資料として覚書（MOU）を提示すると、3 月 27 日に本校生がハワイ訪問の際に、Hawaii Pacific University 在校生（日本からの留学生）の学生による大学案内を計画していると報告があった。

５．　今後の展望：

・Sacred Hearts Academy とのパイロットプログラムを 2025 年 3 月 26 日に実施することで合意。

・Hawaii Pacific University との協議では、MOU（覚書）の提示が予定され、3 月 27 日に本校生へのキャンパスツアーが計画された。

・教員のグローバル教育機会を促進し、プログラムの発展を図る。

（文責　三浦直美）

【6】外部発表

今年度の成果の発表の場として、拠点校主催の研究発表会での発表、また外部主催の研究発表会での発表を行った。

１．　拠点校主催研究発表会

令和７年２月１４日（金）・１５日（土）の二日間にわたり、拠点校にて「リベラルアーツフェスティバル」と称する、研究発表会を行った。本事業で開発する探究型カリキュラムのみならず、拠点校で行っている探究型学習の成果を全校生徒・教職員を前に発表・共有する場として、令和３年度より実施している。ここでは、「未来クリエイト」が１年間の学びの成果をプレゼンテーション形式で発表した。発表を通じて、該当生徒が１年間の学びを体系立てて理解することができ、海外研修を含めた次年度の学習に向け、実りある中間総括となった。

２．　外部主催研究発表会

（ⅰ）兵庫県高等学校探究活動研究会

令和７年２月８日（土）に、兵庫県教育委員会主催の兵庫県高等学校探究活動研究会に参加した。本事業で開発する「日本文化探究」履修生徒１名が代表として参加し、ポスターセッションを行った。外国にルーツのある生徒であり、質疑応答への対応など心配していたが、来場者からの質問にも適切に応答することができ、探究型学習のみならず、日本語の学習成果も発揮することができた。また、「床の間」についての発表であったが、来場者、特に高校生からは、「全く知らなかったので勉強になった。」と感想があり、日本人にも興味深い内容であったことがうかがえた。一方、「外国からの視点をより盛り込んではどうか」といった指摘もあり今後の発表に向けてのアドバイスも得ることができた。

（ⅱ）姫路グローバル高校生サミット

令和７年３月２０日（祝・木）に、姫路市主催の姫路グローバル高校生サミットに参加した。本事業で開発する「日本文化探究」履修生徒のうち５名がポスターセッションを行った。姫路市内の高校生や教員、また一般に来場された方と活発なやり取りをする様子が見られた。他校の生徒の発表を見て刺激を受けることもでき、一年間の学習の集大成として、また次年度の学習に向けての準備として充実した時間を過ごすことができた。

（３）今年度の成果と課題

外部への発表は、「外の目」が入ることで、生徒が大きく成長する場となることを強く感じた。もちろん授業で友人や教員の前で発表することも意義があるが、見知らぬ他者の前で発表することで、生徒が相手に伝えたいというコミュニケーションの意義を実感し、表現力や主体性が伸ばされる。次年度はより積極的に外部発表の機会を取り入れ、それに向けて計画的に取り組めるよう教員でサポートを行っていきたい。（文責　上田友梨香）

図１（ｉ）兵庫県高等学校探究活動研究会　　図２（ⅱ）姫路グローバル高校生サミット

【7】ルーブリック評価作成

本事業構想の実現にあたり、拠点校における、グランドデザインに基づいたルーブリック評価の実施を計画している。その目的は、大きく２つある。１つにはもちろん、本事業において開発するカリキュラムの評価とさらなる改善のために必要な客観的指標としての役割がある。もう１つは、本カリキュラムで学ぶ生徒が資質・能力を伸長するために、自身の現状を知るために必要なベンチマークの役割がある。このようなルーブリック評価の実施にあたり、今年度はルーブリックの作成と今後の導入計画の立案を行った。

１．　実施内容

ルーブリックの作成にあたっては、拠点校の未来指針である「自立と共生」をグランドデザインとし、教育の柱として掲げる「疑問力・意思力・構成力」を基盤とすることとした。これらの概念を改めて分析し、育成を目指す具体的な資質・能力へと融合・昇華することで、下記の１０のルーブリック評価観点を作成した。

1.　探究心

2.　多角的視点

3.　創造スキル

4.　論理性

5.　開放性

6.　挑戦心

7.　協働性

8.　表現スキル

9.　知識

10.　内省的態度

また並行してルーブリック観点の概念図も作成した（下図参照）。図では、10 の評価観点が教育の柱を基盤として形成されている様子を視覚化している。教育の柱を 3 原色で表現し、それらをどのような割合で混ぜ合わせるかによって評価観点が導き出されることを示している。さらに生徒の強み弱みによりパレットの配色は異なってくることから、自身の強み弱みを使いながら、それぞれの絵、すなわち未来を描いてほしいという思いを込めている。

図 1　ルーブリック観点概念図

令和 7 年 3 月 21 日に実施した第 1 回検証委員会において、評価観点について助言をいただき、評価観点の精緻化を行った。委員会の構成員は、 甲南学園経営企画室 新美太基氏,、兵庫県元副知事 金澤和夫氏、玉田学園 中村忠司氏の三名である。

以下に、委員会での主な意見を簡潔にまとめる。

・大学生の資質能力の実態と照らし合わせても妥当な観点である。特に、必要な情報を抽出して筋道を立てる能力にあたる「論理性」は重要だと感じる。

・聞く力や理解する力が今後求められることから「開放性」は重要だと感じる。

・拠点校で伝統的に重視している心の教育としての「教養」を、ルーブリックの中でどのように位置づけるかを明確にすべきだろう。

・パレットの色の大きさを使い、各活動や細分化した単元で伸ばしたい資質・能力を可視化する方法が効果的ではないか。

・ルーブリック評価の導入に際しては、教員の理解が不可欠である。どのように教員への研修を進めていくかが重要な課題である。

・それぞれがどのように幸せを実現していくかという「自己実現」という言葉を取り入れてはどうか。

以上の意見を踏まえ、委員会からは提示された 10 の評価観点が概ね妥当であるとの評価を得た。今後は、これらの意見を基にしながら、細かな表現の調整や具体的な改善を進めていく。

２． 今年度の成果

ルーブリック評価の作成に着手したことで、拠点校の教育の方向性を具体化できたことは、大きな成果である。これまで教育の方向性は提示されていたものの、抽象的な表現があり、現場の教員が日々の教育活動に落とし込むことが困難であった。ルーブリックの評価観点を明確化したことで、教育現場での活用が容易になり、具体的な指導に結び付けやすくなったと考えられる。さらに、作成過程において多くの教員と議論を重ねることができたことも重要な成果である。これにより、目指すべき教育の方向性に対する共通認識が醸成された。

３． 次年度以降の展望

今年度作成したルーブリックを拠点校の教育活動に広く展開していく予定である。展開するにあたっては、生徒による自己評価にルーブリックを順次導入し、それに基づいて教員からの助言を行っていきたいと考えている。当初は、本事業で開発したカリキュラムを中心に導入し、徐々に適用範囲を拡大する予定である。最終的には、教科指導や学校行事、校外学習など、あらゆる教育活動にルーブリックを取り入れ、生徒の学びの成果を横断的に把握することを目指している。これにより、より効果的な学校教育の実現に向けて、着実に取り組んでいきたい。

（文責　上田友梨香）

４　拠点校の研究開発の内容・活動実績　（留学生受け入れ）

本項では、本構想の目的である『外国からの入学生を高度人材として育成すること』について、拠点校での取り組みを『入学前』と『入学後』に分けて詳述する。

１．　入学前

拠点点校において英語版ホームページの新規開設を行った。これにより、海外からの受験者獲得が期待される。ホームページ開設にあたっては、国内向けのホームページをそのまま英訳するのではなく、留学生にとって本校の魅力が伝わるよう、構成を工夫した。具具体的には、充実した英語および日本語教育を本校の大きな魅力として前面に打ち出し、海外からの生徒にとって魅力的な内容にした。今後は、閲覧者の行動履歴を分析し、より多くの海外からの受験者に本校の魅力が伝わるよう、ホームページ運営を進めていく予定である。
https://www.himeji-international-school.jp/ja/

２．　入学後

（ｉ）生活支援

来日直後の３月下旬から４月上旬は、留学生受け入れを担当する、国際連携推進センターの教職員が生活基盤整備の支援を行った。住民票や保険等の行政手続き、銀行口座の開設、その他必需品の買い出し等を支援した。来日初期は日本語での日常会話すらままならない。そのため、十分な支援体制を整備してサポートをした。その際、重要となるのが生徒との信頼関係である。留学生一人一人にとって「困ったときに頼れる存在」を学校内に持つことが、３年間の高校生活をスムーズに送るためには不可欠である。そのような強固なつながりを築くにあたり、来日時に国際連携推進センターの教員を中心に積極的なコミュニケーションを図り、できるだけ親密な関係を構築すべきだろう。このことは、上記のような手続き的な支援のみならず、精神的な支援においてより重要となる。初めて親元を離れ、異なる国で学校生活を始めることは大きな不安を伴う経験である。生活、学習で直面する様々な戸惑いを乗り越える彼らにとって「困ったときに頼れる存在」は不可欠であろう。実際、年度開始の１～２カ月では精神的支援を必要とする出来事がたびたび生じた。来日時に構築した関係性が、そのような困難を乗り越えるうえで意義があった。

（ⅱ）学習支援

第二言語としての日本語教育を体系的に行うため、「国際カリキュラム」を新たに導入した。カリキュラムの作成にあたっては、カリキュラムアドバイザーの佐藤奈津氏に監修いただいた。カリキュラム表は下記のとおりである。カリキュラムの特徴としては、学校設定科目として、日本語に関する科目を１年次で９単位設け、国語や社会の履修を２年次に開始する点にある。日常会話ではなく学習のための日本語の習得には、体系立てた日本語教育が必

要であるとの佐藤氏の助言を受け、カリキュラムを作成した。各科目の詳細は以下の通りである。令和６年度の該当カリキュラム履修生徒は、外国にルーツのある生徒を含む高校１年正７名であった。

・日本語Ⅰ
時間数：週５時間
担当教員：教諭１名・ALT１名
内容：「教科につながる日本語　基礎編」を用いた、学習のための語彙・文法の習得など

・日本語会話
時間数：週２時間
担当教員：教諭２名・ALT１名
内容：「GENKI Ⅰ・Ⅱ」及び「教科につながる日本語　応用編」を用いた、やりとりや発表のスキルの習得など

・日本文化探究　（本事業での研究開発カリキュラム）
時間数：週２時間
担当教員：教諭２名・ALT１名
内容：日本文化についての探究型学習を通じた、言語スキルの習得

実施にあたっては、科目間の連携を重視し、効果的な日本語能力向上を図った。さらに日本語と日本語で学習する他の科目の補助として、放課後に週 2 時間の留学生向けの講座を実施した。具体的には、日本語習得に関わる講座が週に１時間、日本語で学習する数学や理科などに関わる講座が週に１時間である。数学や理科に関する講座では、生徒が理解できない部分について、教員に質問する形式で進めた。

３．　成果と今後の課題

本格的な留学生受け入れ体制構築の初年度であった令和６年度は、手探りで困難も多かったものの、校内での受け入れ体制を構築できたことは大きな成果であったと考える。生活面においては、来日初期段階に生徒との間で緊密な関係を構築できたことが年間を通じた支援の継続につながったと感じている。すなわち、生徒と教職員の間に信頼関係を築くことができたからこそ、生徒側から支援を求められるような心理的距離を維持することができ、必要な支援が行き届いたと考えている。学習面においては、日本語教育を重点的に行うことで、日本の高校へのスムーズな適応を可能にすることができ、また２年次以降を見据えながらの指導も可能になった。

今後の課題としては大きく２点ある。１点目は日本語教育のさらなる充実である。１年目の取り組みを振り返り、一定の効果を上げることができたと考えているが、今後はカリキュラムアドバイザーの指導のもと、今年の成果を検証し、実際に留学生の生徒からフィードバックを得ることで、継続的で効果的な改善を進めていきたい。また、２年次からは国語や社

会といった、留学生にとってより困難が予想される教科の履修が始まることから、それに対する学習支援についても検討が必要である。日本語教育担当教員のみならず、教科担当それぞれの意識付けが必要となるため、学校全体での取り組みを進めたい。２点目は、進路支援の強化である。本構想では、受け入れた留学生を日本社会で活躍するグローバルな人材へと育成することを目指している。したがって、留学生の育成は高校で完結するものではなく、その後の進学先である大学をはじめとする高等教育機関へとつなげていく必要がある。本校を卒業した留学生が進学先を決めるためには、日本を始めとした各大学等との連携を強化し、留学生が高校卒業後の進路を具体的に描けるよう支援していく。例えば、大学の講義に触れる機会を在学中に提供するなど、在学中から高等教育の実態を知ることができる体験を提供する。これらの取り組みを通じて、留学生の進路を支援する体制を整備していく。これらのことを踏まえながら、留学生の受入れ体制につき、引き続き構築を進めていく計画である。

（文責　上田友梨香）

５　外部連携

本構想では、城下町という地の利を生かし、日本人高校生と外国人高校生が切磋琢磨しながら地域視点を持つグローバル人材へと成長することを目指している。その実現のために必要となるのが、以下の３点である。

（１）中学校からの人材（特に留学生）の受入れ

（２）高校での資質・能力の育成

（３）人材の大学（高等教育）への送り出し

これらの観点を踏まえ、外部連携を進めながら、AL ネットワークの構築を推進している。

（１）中学校からの人材（特に留学生）の受入れ

海外事業協働機関であるタラカニタ財団（インドネシア）との連携協定をもとに、所轄するタラカニタ第４中学校を**オフショアスクール（海外分校）**として指定し、拠点校への入学生を受け入れることとしている。令和６年度は受入れ元年であり、２名の生徒に入学を許可した。オフショアスクールでは、日本語教育の必須化や日本文化クラブの運営等を行い、生徒たちが日本への理解を深める環境を整備している。また、令和５年度までに拠点校とオフショアスクール間での教員の相互派遣を行ってきた。これらの取り組みにより、初年度でありながら円滑な留学生受入れが可能となった。さらに令和６年度には、次年度入学生の選考のみならず、受入れの本格化と拡大に向け、連携にかかる打ち合わせを行った。

入学選抜は、オフショアスクールでの第一次選抜後に拠点校で第二次選抜を行うという二段階選抜を採用している。令和６年度入試は、以下の日程で行った。また下記に続いて、保護者も交えた三者面接も行った。選抜を経て、令和７年度入学生２名が決定した。

令和６年１０月　　第一次選抜完了

令和６年１１月２１日　　第二次選抜　生徒面接

さらに連携にかかる打ち合わせを行うため、管理機関及び拠点校の長と教頭兼国際連携推進センター長が、令和７年３月２日～6 日にかけて、インドネシア・ジャカルタのタラカニタ財団およびオフショアスクールを訪問した。訪問の主な目的は、次年度の両機関間の事業計画の調整である。摺河学園からは、現地での日本語教育の充実に向けた計画を共有し、タラカニタ財団からも同意を得た。一方で、タラカニタ財団側からは、より密な連携や留学生の送り出しの拡大への意欲が示された。摺河学園としても、これに応えるべく留学生受け入れ体制の体系化を進めていく方針を確認した。

また、訪問中には令和７年度入学生の保護者との対面面談も行われ、連携強化の良いスタートとなった。

（２）高校での資質・能力の育成

留学学生の受入れ及び地域視点を持ったグローバル人材の育成を拠点校で推進するのと並行して、国内連携校ともノウハウや課題を共有し、取り組みを展開できるよう進めている。令和６年度は国内連携校３校と２月２７日に協議を持ち、留学生の受入れ状況と今後の展望及び成果と課題について意見交換を行った。

国内連携校からは、近江兄弟社中学校・高等学校　谷口副校長、静岡聖光学院中学校・高等学校　田中教頭、蒼開中学校・高等学校　中嶋教頭に出席いただいた。各校からは、留学生の受け入れ状況と、その成果や課題について報告があり、それについての質疑応答を行った。各校の状況は以下に記載するが、留学生を積極的に受け入れ、人材として育成しようという取り組みを各校が行っており、拠点校との方針の一致を確認することができた。

＜近江兄弟社中学校・高等学校＞１年以内の留学生の受け入れを行っている。留学生が日本語を学習する姿勢から日本人生徒が刺激を受け、英語等の学習意欲を高めることができている。

＜静岡聖光学院中学校・高等学校＞１年程度の留学生の受け入れを行っている。留学生に対しては、日本語指導をカリキュラムとして実施しており、今後３年の留学生受け入れも進めていきたいと考えている。留学生の日本の大学への進学実績もあり、進路指導も行っている。

＜蒼開中学校・高等学校＞正規入学生として３年間の留学生の受け入れを行っている。日本語指導を行っているものの、国語を始めとした学習及び生活において支援の必要性を感じている。

＜姫路女学院中学校・高等学校＞正規入学生として３年間の留学生の受け入れを行っている。オフショアスクール制度による継続的な入学に加え、今後もさらに留学生の受け入れを拡大していきたいと考えている。留学生の存在が、日本人生徒の異文化理解を自然に促進している。

管理機関の長である理事長より、今後、広く留学生受け入れを行っていくための連携を呼びかけ、会議は閉会した。

（３）人材の大学（高等教育）への送り出し

事業協働機関である各大学との連携構築を進めた。甲南大学とは、３ヵ年の本事業を見通し、段階的に連携を進めた。令和６年度には、まず、大学教授による特別講義の実施と、先取り履修の協議を行うための協定の締結を行った。

（ｉ）大学教授による特別講義

甲南大学全学共通教育センター 教授の石川隆士氏を招き、本事業で開発する探究型カリキュラム「未来クリエイト」において特別講義を２回実施した。内容としては、マーケティングへの活用を念頭に、どのような顧客アンケートを作成すべきか、またどのように分析し次に生かすかについて講義を受けた。

＜第１回＞
日時：令和６年１０月日（土）９：３０～１１：２０
参加生徒数：１３名
内容：効果的なアンケートの作り方

＜第２回＞
日時：令和６年１１月 14 日（土）９：３０～１１：２０
参加生徒数：１３名
内容：マーケティングと顧客アンケート結果分析

（ⅱ）先取り履修の協議を行うための協定の締結

令和７年１月７日に、甲南大学と拠点校間で協定を締結した。内容としては、本事業に関わる高大連携の取り組みについてであり、具体的には、先に述べた講師派遣等の教員や生徒・学生の交流と、先取り履修の検討である。先取り履修については、令和８年度の実施を念頭に、協議を今後進めることで合意した。

以上、高校における留学生の資質・能力の育成を中心に据え、受け入れや送り出しに関する各連携先との今後に向けた足がかりを築くことができた。令和７年度は、これらの取り組みをさらに充実させていきたい。　（文責　上田友梨香）

６ 研究開発の成果と課題

【1】成果概要

今年度の事業の成果としては、大きく３つが挙げられる。

１つ目は、AL ネットワーク形成による外部機関との具体的な協議を行うことができた点である。　本事業の開始にあたり、新たに大学や国内高等学校との連携の機会が得られた。特に本事業で目指す、留学生受入れ拡大によるグローバル人材育成に対する期待の表れであると考えている。だからこそ、連携直後から具体的な協議を開始することができ、３ヵ年の見通しを持ちながら事業の実施が可能となっている。例えば、甲南大学とは、３年後の先取り履修の実現という具体的な目標が共有できた。また連携によって、双方の様々なリソースが共有され、当初想定していなかった連携の可能性も示唆されつつある。今後もネットワークの質を高めつつ、ネットワークのさらなる拡張を進めていきたい。

２つ目は、探究型カリキュラムの再構築と新たな挑戦ができた点である。日本文化探究という、留学生及び外国にルーツのある生徒に対する探究型カリキュラムの開発では、中学校までの各生徒の学習環境が大きく異なることから、探究型学習の型を基礎から教えることが必要であった。前提となる知識にも差があることから、教員もゼロベースで探究型学習の本質を見直し、再構築する機会となった。このことは、これまで漠然と行ってきた探究型カリキュラムについて、その一つ一つの要素を見返すこととなり、探究型カリキュラムを精緻に再構築する貴重な経験となったと考えている。日本文化探究は２年間継続する探究型カリキュラムのため、今年度同様、各段階を丁寧に進めていきたいと考えている。

また未来クリエイトにおいては、海外研修を探究型カリキュラムに取り入れることに挑戦しており、今年度は、中学校でのカナダ研修旅行と探究型学習の融合を試みた。実地での体験前後の学習の進め方について知見を得ることができた。次年度は、カリキュラムの中核に位置する、台湾研修旅行を実施するため、今年度の成果と課題を反映できるよう、教員間で連携して取り組みたいと考えている。

さらにこれらの探究型カリキュラムの開発を通して、拠点校のグランドデザインに基づいたルーブリック作成を進めることができた。本事業を通じて育成したい資質・能力も想定しながら作成したものである。ルーブリックを通じて、生徒の資質・能力はもとより、探究型カリキュラムの評価にも活用し、改善を進めていきたい。

３つ目は、オフショアスクール構想を大きな滞りなく実現できた点である。これまでも留学生の受け入れ実績はあったが、正規入学生として受け入れるのは初めてのことであった。正規入学生として日本の高校を卒業するためには単位取得が必要であり、そのための教育体制の構築が求められた。留学生に合わせた日本語教育を構築しながらも、日本人生徒とともに学ぶ科目もあった。結果として、留学生は、そのような科目の学習についても大きな遅れをとることなく、一年次を終えようとしている。また、日本や学校の文化への適応にあたっても困難は少なく、オフショアスクールにおける日本文化や日本語に関する取り組みが功を奏していると考えている。今後はさらに入学生を増やすことができるよう、募集や受入

れの工夫を進めていきたい。

このように、本事業を通じて、法人として実現したい教育の在り方を明確化したことが、留学生の受け入れにおける教育体制を、さらに深め、広げる取り組みを推進することができた。次年度も成果を着実に挙げていきたい。（文責　上田友梨香）

【2】今後の課題と展望

今年度の事業の課題としては、大きく３つが挙げられる。

１つ目は、育成したい資質・能力を拠点校の教育活動において客観的に検証することである。今年度は、拠点校で育成したい資質能力を「グランドデザインに基づいたルーブリック」として定義づけるため、検証委員など外部専門家の指導助言も得ながらの概念形成に注力した。具体的な教育活動を想定しながら、拠点校の将来像を見据えた概念となったと考えている。しかしながら、それらの資質・能力の育成の程度を具体的に検証することはできなかった。そこで、特に次年度は、本事業での開発カリキュラムである二つの探究型学習、「未来クリエイト」と「日本文化探究」における成果検証を通じて、カリキュラムの改善と生徒の資質・能力の向上を確認していく。そのため、年間を通じた検証計画を策定し、着実に実施していきたいと考えている。また、「グランドデザインに基づいたルーブリック」の今後の展開も念頭に置いておく必要がある。次年度は探究型カリキュラムに反映する本ルーブリックは、追って、教科指導や学校行事など、あらゆる教育活動の成果検証のツールとして展開する計画である。したがって、様々な教育活動への応用が可能となるよう、次年度も定義づけの見直し等を図っていきたい。

２つ目は、拠点校内での取組の共有である。今年度は、直接的に探究型カリキュラムに関わる教員での研究開発の取り組みが大部分を占めた。しかしながら上述のように、本事業で構築する「グランドデザインに基づいたルーブリック」は、教育活動全般に波及させる計画であるため、全教員の関わりが必須である。管理機関と連携することで、拠点校内体制を整え、取り組みの共有を図りたいと考えている。具体的には、本ルーブリックを具体的な教育活動に落とし込むための組織を教務部内に設けること、本事業を念頭に置いた職員研修を計画することが挙げられる。

３つ目は、留学生受入れ体制の体系化である。今年度はオフショアスクールからの留学生受入れの初年度であった。本報告書でも報告の通り、受入自体は滞りなく進んだ。しかしながら担当教職員による個別対応が中心となり、属人的にならざるを得なかった。留学生の受け入れ人数の拡大を目指すこと、またそのような受入を他校にも広げることを考えると、組

織的な体制づくりが必須となる。次年度は、今年度の実践を踏まえ、体系化を進める必要があると考えている。

３ヵ年という事業期間を見据え、２年目となる次年度にどのような取り組みを行うかが、大きな鍵となる。３ヵ年で一定の成果を出すこと、また事業期間終了後も取り組みを発展させ、コンソーシアム構築を継続することを踏まえて、事業を実施していきたいと考えている。（文責　上田友梨香）

【3】検証委員からの総括

学校法人摺河学園の WWL コンソーシアム構築支援事業に対する

第三者の視点からの評価と今後の展望

元兵庫県副知事　金澤和夫

1.　構想のねらいとその評価

本構想「城下町 Himeji からのグローバル人材育成」は、

①　留学生の受け入れ

②　探究型学習

の二つを大きな柱として、グローバルな視点と意思疎通能力を備えつつ、姫路・播磨地域の歴史文化を理解しまちの魅力化に貢献できる人材を育成しようとするものである。

日本においてグローバル人材育成の必要性が叫ばれて久しく、教育現場でも数多くの取り組みがなされてきたが、そうした人材が実際に活躍する場は首都圏や国際社会に偏在する傾向があったことは否めない。

その一方で、少子化が進む中で若者の首都圏・大都市圏への流出が続き、それ以外の地域の人口減少には歯止めがかかっていない。このような地域においても外国人人材が必要とされ、現実に多くの外国人が社会経済の支え手になっているのは紛れもない事実であり、このような地域においてこそグローバル・ローカル双方の視点を備えた人材が求められている。

本構想はこうした要請に応えようとするものであり、これからの日本の中等・高等教育に期待される役割を果たす道を切り拓くものとして、大きな期待を寄せるものである。

2.　構想の具体的展開

(1) 日本人学生向けの環境整備

→「グローバルな視点」獲得のため、姫路女学院では次の事業が進められている。

①　カナダ（中学生）、ハワイ（高校生）への研修旅行・現地校訪問

②　姉妹校であるナザレ校（ポーランド）との交流（広島研修）

③　姫路女学院のオフショアスクール（海外分校）の協定を結んだタラカニタ第４中学校（インドネシア）からの留学生の受け入れ

さらに今後、次の事業に取り組む予定とされている。

①　ケーマシリ・メモリアル校（タイ）、啓星高校（韓国）と協働して、各校の探究型学習の成果について意見交換する高校生国際会議を開催

②　国立基隆女子高級中学（台湾）と、地域探究について継続的に交流し台湾現地で意見交換を行う。

→「ローカルの視点」獲得のため、

①　城下町に所在する国内連携校と城下町教育 AL ネットワークを構築し、姫路女学院での研究開発や取り組みの共有が図られている。

連携校；近江兄弟社中学校・高等学校（滋賀県・安土城）

静岡聖光学院中学校・高等学校（静岡県・駿府城）

蒼開中学校・高等学校（兵庫県・洲本城）

②　高大連携を視野に、甲南大学と連携協定を結んで事業の協議が行われている。

(2) 海外からの留学生向けの環境整備

①　姫路女学院では、海外連携校において、留学前から姫路女学院の教育理念に基づいた日本語学習・生活学習を実践する「オフショアスクール（海外分校）」制度の導入が進められている。

インドネシアのタラカニタ財団とはすでに第一号のオフショアスクール協定を締結して留学生の受け入れが始まっており、今後パラグアイ、台湾、タイ、韓国等にも拡大する方針とされている。

②　留学生が姫路女学院を卒業した後は、日本の大学への進学や日本企業への就職の道を拓くシステムの構築を目指しており、協力関係にある金沢工業大学にはすでに留学生が２名進学している。

(3) グローバル・ローカル視点の探究型学習に向けたカリキュラム開発

①　大学の先取り履修や企業研修を組み込んだ先進的な探究型カリキュラムの開発については、多くが今後の取り組みに委ねられている。

留学生を含むダイバーシティに富んだ学習環境のもとで、グローバルな言語・情報・人間関係に常に触れながら、姫路市の魅力化という具体的課題に取り組むというのは、探究型カリキュラムのテーマとして大変興味深いものであり、今後の研究開発の進展に大いに期待したい。

②　探究型カリキュラムの研究開発にあたっては、学校のグランドデザインに基づきルーブリック評価を導入して、カリキュラムマネジメントを行っていく方針が示されている。探究型カリキュラムに馴染む評価方法であり、適切なかたちでの導入が強く求められる。

3.　今後の取組に向けて

人、モノ、情報のグローバル化はますます加速しつつあり、社会を構成する人間そのものも、彼らが持つ文化的背景や価値観も、多様化の一途をたどっている。そうした多様化が、社会の分断と対立ではなく、融和と協調をもたらすようにすることは、世界の多くの国々がいま直面しているきわめて大きなかつ困難な課題である。

従来、地方都市はグローバル化について大都市に一歩遅れをとってきた。しかし、今なお固有の歴史文化を色濃く残す姫路のような地方都市であればこそ、グローバルとローカル

を融合させることによって、多様性にあふれつつも一体性を失わない、融和と協調をベースとする新たな社会を現実のものとして創り上げていける可能性が高いと考える。

この意味で、グローバル・ローカル双方の視点を兼ね具えた人材を世に送り出すべく、姫路女学院が進めようとしている本構想には、大きな期待を寄せるものである。

本構想の中で重要な位置を占めるオフショアスクール（海外分校）は、姫路女学院が建学１００年を超える歴史の中で育んできた「誠実・敬愛・礼節」などの理念と日本型教育システムの優れた部分を、海外において中等教育の段階から移植し、一定の素養と価値観を身につけてもらった上で留学生として受け入れようとするものである。日本人生徒の海外留学が比較的少数にとどまりがちなのに対し、海外留学生の受け入れや海外提携校との交流は、国内で学び続ける多数の生徒に世界の多様性に直接触れる機会を提供することが可能であるという点で、取り組みの効果のすそ野が広い。

オフショアスクールの試みはこれまで全国でも例を見ない先導的なものである。今後、姫路女学院のみにとどまらず、連携校をはじめとする全国の中学校・高校に拡大・発展していくことが望まれる。

今回の WWL コンソーシアム構築支援事業は、姫路女学院がこれまで個別に取り組んできた国際教育やリベラルアーツ教育の実践を基礎としながら、その上に先進的なカリキュラム開発と関係機関のネットワーク構築を組み合わせることにより、グローバル・ローカル双方の視点を具えた人材育成を「システム化」していくための重要な契機となるものと考える。

多くの課題の克服が２年次目以降に委ねられているが、本構想のポテンシャルはきわめて高く期待もそれだけ大きいことを、管理機関である摺河学園においては十分認識いただき、次年度以降課題の克服に積極的に取り組まれることを期待したい。